

18-19
NOV
2023

第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム
— つながる多様性、広がる可能性

香港大学專業進修學院
香港日本語教育研究会

The University of Hong Kong, School of Professional and Continuing Education
Society of Japanese Language Education Hong Kong

<https://www.13thsymposium.hkustspace.hku.hk>

THE 13TH INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON JAPANESE LANGUAGE EDUCATION
AND JAPANESE STUDIES — Embracing Diversities, Igniting Potentials

第 13 回
国際日本語教育・日本研究シンポジウム
——つながる多様性、広がる可能性——

**The 13th International Symposium
on Japanese Language Education and Japanese Studies
—Embracing Diversities, Igniting Potentials—**

2023 年 11 月 18 日・19 日
香港大学專業進修学院
香港日本語教育研究会

概要

1994 年より香港日本語教育研究会が香港の高等教育機関と連携し、2 年ごとに日本語教育・日本研究を対象として、国際シンポジウムを開催してまいりました。発足してから、香港で日本語教育・日本研究に携わる主な教育・研究機関が本事業に勢力を注いでおり、日本、中国大陸、台湾、韓国、東アジア、東南アジア、アメリカ、カナダ、欧州、豪州から多くの教育者・研究者が参加してきました。毎回の参加者数は 300 人を超えており、のべ 3,000 人ほどの参加者を迎えました。既にこの地域における重要なイベントとなり、伝統ある国際大会となっております。

本事業は、2023 年 11 月に香港大学專業進修学院での開催に向けて、2022 年の夏より香港大学專業進修学院の日本語教育・日本研究の教員と香港日本語教育研究会の代表理事を中心としたメンバーで大会の準備を進めて参りました。さらに、香港における各大学、高等教育機関の日本語教育・日本研究部門の関係者にもこの企画に協力を依頼しております。

大会テーマ

第 13 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム

「つながる多様性、広がる可能性」

本シンポジウムのテーマは「つながる多様性、広がる可能性」(Embracing Diversities, Igniting Potentials)とします。近年、グローバル化と IT 技術の日進月歩の飛躍的な発展によって、人的移動、情報の流通が加速化され、あらゆる分野において多大な影響が及ぼされ、世界中の教育制度や内容に変化が起こっています。とりわけ外国語教育がますます重要視される方向へと着実に向かっており、もはや日本語教育関係者もこの巨大な潮流を軽視することはできません。従って、本シンポジウムのテーマは、今日、急速に変化しつつある世界の潮流を総称するのに相応しいテーマだと思われま。

共催

香港大学專業進修学院

<https://hkuspace.hku.hk/interest/languages/japanese>

香港日本語教育研究会

<https://www.japanese-edu.org.hk/jp/>

助成

国際交流基金

後援・協力

在香港日本国総領事館

香港大学

香港中文大学

香港城市大学

香港理工大学

香港浸会大学

香港科技大学

香港教育大学語言学及現代語言系

香港澳大利亞伍倫貢書院

香港理工大学香港專上学院

香港中文大学專業進修学院

嶺南大学持續進修学院

香港都会大学李嘉誠專業進修学院

澳門大学

香港日本文化協会

香港留日学友会

香港日本人俱樂部

香港日本人商工会議所

実施委員会

実施委員会委員長 香港大学專業進修学院

実施委員会副委員長 香港日本語教育研究会

陳 徳奇

梁 安玉 (マギー・リョン)

実施委員会委員

国際交流基金 海外派遣日本語教育専門家

国際交流基金 海外派遣日本語教育専門家

香港大学專業進修学院

香港大学專業進修学院

香港科技大学語文教育中心

香港日本語教育研究会

香港日本語教育研究会

香港日本語教育研究会

香港日本語教育研究会

伊達 久美子

田邊 知成

江 仁傑

黒木 扶美

平田 昌之

松本 真澄

亀島 裕美

李 澤森

黎 振洋

目次

大会委員長挨拶	6
大会副委員長挨拶	7
大会プログラム	8
基調講演	10
平高 史也 教授（愛知大学文学部特任教授・慶應義塾大学名誉教授） 演題：「相互理解のための日本語」再考——日本語教育を超えて	
ミヒールセン・エドウィン 助教授（香港大学現代言語文化学部助教授） 演題：近現代日本文学の再考——文学教育の多様性に向けて	
山田 昌弘 教授（中央大学文学部教授） 演題：幸せに衰退する日本——バーチャルが格差を埋める時代に	
発表スケジュール	11
発表要旨	19
会場周辺の地図	123
フロアレイアウト	124
懇親会会場への地図	126

大会委員長挨拶

「第 13 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム——つながる多様性、広がる可能性——」の主催者を代表し、ご挨拶申し上げます。香港大学專業進修学院および香港日本語教育研究会の共催により、この度のシンポジウムを開催できますことを大変うれしく存じます。

はじめに、ご後援を賜りました国際交流基金、並びにご協賛いただいた多くの教育機関・関係団体の皆様に心より御礼申し上げます。お陰様で、5 年ぶりにここ香港において本シンポジウムが開催できることを、何よりもありがたく思っております。また、海外からお越しいただいた参加者の皆様におかれましては、香港までご参集いただき、大会委員長として厚く御礼申し上げます。

香港は中華圏でも、いち早く国際化が進み、諸外国からの文化を幅広く受け入れ、「多様性」が深く浸透した国際都市として、目覚ましい発展を遂げてまいりました。中でも、香港の人々の日本の文化や伝統に対する興味・関心は非常に高く、香港の至る所で目にする日本料理店、そして日本製品の豊富さからも、それは明らかです。

一方、香港から日本への渡航者数は、2019 年には 230 万人に達し、2021 年の統計では、香港市民の 100 人に 2 人が日本語を解すると報告されています。香港での日本語学習者はおよそ 25,000 人にも及び、日本研究が専攻できる高等教育機関は香港に 6 機関あります。このような状況は、香港における日本の存在感を如実に物語ります。

前回、2018 年に「第 12 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム——多言語世界における日本語教育の変遷——」が開催されて以降、世界の教育環境は大きく変化しました。新型コロナウイルスにより、国境を越えた人々の往来や文化交流が途絶え、教育現場においても、従来「可能」であったことが「不可能」となり、様々な変革を強いられてきました。その一方で、この未曾有の事態を契機に、これまで「不可能」とされてきたことが「可能」になった点も、枚挙にいとまがありません。

新しい時代の過渡期に、日本語教育・日本研究に携わる私たちは、大きな方向転換を余儀なくされているのではないのでしょうか。昨今は VUCA の時代と呼ばれ、将来の見通しが立ちにくい社会に直面しています。しかし、そのような時代だからこそ、そこに生きる私たちが主体的に社会に向き合い、関わり合うことで、国を超えた相互の絆が深まり、より良い未来が実現できる「可能性」が生まれると確信しております。

最後に、本シンポジウムの開催に当たり、格別のご尽力、ご協力をいただいた香港の各日本語教育機関の関係者の皆様に、心から感謝申し上げますとともに、ご参加された皆様の益々のご健勝、ご活躍を祈念申し上げます。

第 13 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム委員長
香港大学專業進修学院
陳 徳奇
2023 年 11 月吉日

大会副委員長挨拶

香港日本語教育研究会が 1994 年より香港の高等教育機関と連携し、2 年ごとに国際日本語教育・日本研究シンポジウムを開催してまいりました。発足以来、香港で日本語教育・日本研究に携わる主な教育・研究機関が本事業に力を注いでおります。これまで 12 回の大会において、日本、中国大陸、台湾、韓国、東アジア・東南アジア、アメリカ、カナダ、欧州、豪州から多くの教育者・研究者が参加してきました。既に四半世紀にわたり、この地域における重要なイベントとなり、伝統のある国際大会となっております。

2020 年は新型コロナウイルス感染拡大によって、各国・地域間の往来が殆ど中断されました。感染終息の兆しが見えていない中、同年開催予定の第 13 回日本語教育・日本研究シンポジウムは、関係者の安心安全のため、やむを得ず日程を再三延期にいたしました。

2022 年の秋より、世界中の感染状況を鑑みて、ようやく 5 年ぶりに、第 13 回シンポジウムを 2023 年 11 月に、香港大学專業進修学院で開催することを決定いたしました。大会のテーマは「つながる多様性、広がる可能性」(Embracing Diversities, Igniting Potentials) といたします。

近年、グローバル化と IT 技術の日進月歩の飛躍的な発展によって人的移動、情報の流通が加速化されています。さらに、2020 年より 3 年ほどコロナ感染予防のため、あらゆる分野において多大な影響が及ぼされ、特に教育におけるオンライン化、バーチャル化の進展で、世界中で教育制度と内容を巡る変化が起こりつつあります。

そこで、このような未曾有のスピードで進んでいる変化に、本シンポジウムを一つのプラットフォームとして、様々な視点から語学学習・教育の個人的、社会的、グローバルな多様性と可能性を考え、異なる文化の人々が、同じく言語教育に携わっている者同士が、如何に文化や思想の相違を乗り越え、共存し、平和的な世界を築き、ソフトパワーとしての語学学習・教育の未知なる多様性、無限の可能性や道標を探究できれば幸いです。そして、ポストコロナ時代の国際社会における日本語教育と日本研究へのさらなる促進と展開に貢献できる足掛かりとなることを大いに期待しております。

最後に、第 13 回シンポジウムの開催準備にあたり、在香港日本国総領事館をはじめ、独立行政法人国際交流基金、香港における各日本関係団体、並びに大学、高等教育機関の日本語教育・日本研究関係者の方々によるこの企画へのご支持に感謝の意を申し上げます。

2023 年は希望の年、平和の年、躍動の年、新しいつながりと広がり的一年でありますよう心から願ってやみません。

第 13 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム副委員長
香港日本語教育研究会 会長
梁 安玉
2023 年 11 月吉日

大会プログラム

2023年11月18日(土) 大会スケジュール

時間	会場	内容	備考
08:30-17:00	202	受付	
09:30-10:00	201	開会式	
10:00-11:00		基調講演 1 平高 史也 教授	
11:00-12:00		基調講演 2 ミヒールセン・エドウィン 助教授	
12:00-13:30	11階& 12階	昼食	
	1206	配布場所	
	11階& 12階	食事場所	
13:30-15:00	1101・1102・ 1103・1104・ 1105・1201・ 1202・1203	分科会（口頭発表 I）	
15:00-15:15	11階& 12階	コーヒープレイク	
	1206	配布場所	
15:15-16:45	1101・1102・ 1103・1104・ 1105・1201・ 1202・1203	分科会（口頭発表 II）	
18:00		懇親会	事前登録者のみ

大会プログラム

2023年11月19日（日）大会スケジュール

時間	会場	内容	備考
09:00-15:00	202	受付	
10:00-11:00	201	基調講演 3 山田 昌弘 教授	
11:15-12:45	1101・1102・ 1103・1104・ 1105・1201・ 1202	分科会（口頭発表Ⅲ）	
12:45-13:45	11階& 12階	昼食	
	1206	配布場所	
13:45-15:15	1101・1102・ 1103・1104・ 1105・1201・ 1202	分科会（口頭発表Ⅳ）	
15:15-15:30	11階& 12階	コーヒードリンク	
	1206	配布場所	
15:30-17:00	1101・1102・ 1103・1104・ 1105・1201・ 1202	分科会（口頭発表Ⅴ）	
17:15-18:15	201	フォーラム	
18:15-18:30		閉会式	

基調講演 1

平高 史也 教授（愛知大学文学部特任教授・慶應義塾大学名誉教授）

「相互理解のための日本語」再考——日本語教育を超えて

パンデミックや戦争に揺れている国際社会で言語教育はどのような役割を果たせるのでしょうか。本講演では、CEFRの根底にある複言語複文化主義、国際交流基金のJF日本語教育スタンダードの理念である「相互理解のための日本語」、故徳川宗賢氏によって提唱されたウェルフェア・リングイスティクスを手がかりに、平和の構築に貢献する言語教育の可能性を探ります。

基調講演 2

ミヒールセン・エドウィン 助教授（香港大学現代言語文化学部助教授）

近現代日本文学の再考——文学教育の多様性に向けて

日本とその人々が単一民族国家であるという国内外の認識は、今日に至るまで続いています。たとえば、日本の国語教育の中・高等学校の教科書を一目見るだけで、この認識が確認できるでしょう。しかしながら、最近の文学賞受賞者や候補者をよく見てみると、外国人または外国出身の作家もいることに気づきます。また、日本の近現代文学の長い歴史とその膨大な量のテキストは、多様な、国際的なつながりや複雑な物語から成り立ったこともわかります。さらに、時代を遡ると、私たちが「日本の文学」と呼ぶものは常に複数の言語や文化の混合物であったことがわかります。本講演においては、国語教科書以外の視野を広げ、いくつかの「ジャポノフォン」（日本語文学）作家を考慮に入れながら、日本文学を定義するという簡単なようで複雑な問いについて考えます。

基調講演 3

山田 昌弘 教授（中央大学文学部教授）

幸せに衰退する日本——バーチャルが格差を埋める時代に

平成に入ってからからの日本社会の30年あまりは、①経済停滞が続き、②少子高齢化が進み、③男女平等は進まず、④様々な格差が進展した時代でした。その中で、現実で活躍できず格差が埋められない若い人々は、ゲームや推し活など「バーチャル世界」で自己実現を計る傾向が強くなっています。その状況をデータから示します。

発表スケジュール

2023年11月18日(土) 13:30-15:00

11階			
部屋番号	13:30-14:00	14:00-14:30	14:30-15:00
HPC1101 進行係： 飯田 由美	塩見 光二 日本語初級コース Lang1210 における Blended Learning を有効活用したコースデザインの実践 ——つながる、機能する、広がる——	亀崎 晶子 初級日本語教育における媒介語使用の有効性 ——ビジネスパーソンを対象とした教育現場から——	
HPC1102 進行係： 戸田 隼介	結城 佐織 日本語教育における翻訳の授業 ——ペアワーク活動の効果と授業評価を中心に——	山崎 誠 日本語と中国語における構文の長さや丁寧さの関係についての考察	NGUYEN THI NHU Y、 DINH THI VIET HIEN 日本語とベトナム語における「青」という色彩語の感情概念メタファー ——認知言語学の観点から——
HPC1103 進行係： 板倉 ひろこ	原 隆幸 異文化理解能力の参照枠を活用した日本語教育の可能性	永岡 悦子 日本で学ぶ留学生のための異文化理解教育の実践と教材の開発 ——授業評価アンケートの分析から見えてきたもの——	立川 真紀絵 ビジネスコミュニケーションにおける「異文化」に対する意識の構築 ——日系企業に勤務する外国人ビジネスパーソンに対するインタビューから——
HPC1104 進行係： 中西 久実子	小池 直子 日本語母語話者教員と非母語話者教員の作文添削 ——中国の大学の作文授業担当教員へのインタビューから——	Luolin LIU 【英語発表】 Beliefs about Speech Education and Teaching Practices of Japanese Language Teachers in Universities across China: Results of a Model-based Questionnaire Survey	村上 純一 社会人を対象とした高級日本語コース・プログラム ——成人学習者の知識欲を満足させる教材を——
HPC1105 進行係： 清水 泰生	水崎 泰蔵 UKPSF で審査を受けた専門日本語分野に関する考察	羅 永祥 専門日本語教育から見た CA の日本語使用場面における語彙的特徴分析 ——台湾及び中国の教科書を中心に——	赤城 永里子 アカデミックライティングにつながる読解授業の方法の検討 ——実践から見える意見文作成上の課題——

12階

部屋番号	13:30-14:00	14:00-14:30	14:30-15:00
HPC1201 進行係： 林 淑丹	徐 揚 中国における『千と千尋の神隠し』 ——中国から見る『千と千尋の神隠し』と『紅き大魚の伝説』——	李 昕雨 『もののけ姫』における自然観 ——『羅小黑戦記 ぼくが選ぶ未来』との比較を通じて——	米村 みゆき 宮崎駿のアニメーション映画における現地化と〈視覚的叙述〉 ——英語吹替版を対象として——
HPC1202 進行係： 大戸 雄太郎	明石 智子 日本語継承語学習者と外国語日本語学習者が学び合えるトランスランゲージング・スペースに関する教育実践の報告 ——香港における取り組み——	大戸 雄太郎 日本における初級日本語科目履修中断者の発音学習 ——日本人とのコミュニケーションに着目して——	林 静賢、高橋 李玉香 【中国語発表】 中小學日語課程 ——目標達成及挑戦——
HPC1203 進行係： 小出 雅生	Jianyu WANG 【英語発表】 The learner's arbitrary interpretation of the score of JLPT	小池 真由 日本語教育における教案の授業導入部分について ——多様な学習者に理解される授業の導入——	Nozomi TOKUMA 【英語発表】 Motivations for Japanese Language Learning in North East India

2023年11月18日(土) 15:15-16:45

11 階			
部屋番号	15:15-15:45	15:45-16:15	16:15-16:45
HPC1101 進行係： 村上 仁	清水 泰生 スポーツメガイイベントと日本語 テキスト・会話集	戸田 隼介 日本語学習の入り口としての日 本文化相撲の多角的側面 ——海外相撲ワークショップ実 践報告——	林 朝子、 Saranya CHOCHOTKAEW 日本語学習者を対象とした書道 活動のあり方 ——COVID-19 渦前・渦中・渦 後の学生アンケートと教員観察 を通して——
HPC1102 進行係： Matej VRBOVSKY	Matej VRBOVSKY 【英語発表】 Sentence-Final Particles and Utterance Interpretation Re-examining the Relation between Sentence-Final Particle zo and Imperatives	Hiroko ITAKURA 【英語発表】 Is bragging impolite in Japanese culture?	Raluca Maria CIOLCA 【英語発表】 Are there different degrees to perfection in different languages? A comparison between Japanese, English, and Romanian
HPC1103 進行係： 原 隆幸	中東 靖恵 地域に暮らす外国人労働者にと つての地域日本語教育の役割 ——岡山県総社市のベトナム人 技能実習生を対象とした調査を もとに——	高橋 佑稀乃 地域協力に関する国際機関の役 割 ——パブリックディプロマシー組 織としての日中韓三国協力事務局 ——	鄭 惠先、平田 未季 日本の大学における合理的配慮 決定までのプロセスの実際 ——韓国との対照から見えるこ と——
HPC1104 進行係： 伊藤 秀明	劉 志毅 テキストにおける描写視点の変 更について ——能動文・受動文の表現効果 と機能を視野に——	鈴木 梓 現代日本語の文末表現「くな い？」の婉曲的機能 ——新ぼかし表現の一例として ——	Sathida KANJAMAPORNKUL 言語学における独り言の実際 ——フィクション会話と自然会 話の観点から見た日本語の独り 言——
HPC1105 進行係： 高田 和幸	下村 朱有美 コロナ禍で渡日延期を余儀なく された留学生はどのように渡日 を待っていたのか ——複線径路等至性モデルによ る分析の試み——	SuiSumWalden YEUNG ポストコロナに向けたオンライ ン留学の可能性と課題 ——コロナ禍のオンライン留学 実態の検討から——	小出 雅生 香港再発見 ——コロナ後の日本からの留学 生が見つけた香港——

12 階			
部屋番号	15:15-15:45	15:45-16:15	16:15-16:45
HPC1201 進行係： 福田 州平	Shutan LIN 【英語発表】 Kazuo Ishiguro: Multidimensions and Paling Effect in His Early Works	斉藤 穂高 エアポート・タラップ・ファイ ナルコール ——消えゆく心象風景——角松敏 生作品を中心に——	
HPC1202 進行係： 米村 みゆき	白石 祝子 〈食人〉系アニメーション研究	樋口 謙一郎 望月カズ人物史の再編成 ——課題と展望——	二村 洋輔 ボルネオ『俘虜収容所月報』に みる原住民観と帝国陸軍の対外 言語普及戦略
HPC1203 進行係： 平寫 寛大	平寫 寛大、宮木 杏、 鈴木 ケネス、蟹沢 歩、 深井 友梨花、佐々木 大登、 東海 晃久、斎藤 暢是、 依田 悠介 令和時代の「死」の意味論	藤本 秀平 占領初期の沖縄における人の分 断 ——小説に描かれる「混血児」 ——	

2023年11月19日(日) 11:15-12:45

11 階			
部屋番号	11:15-11:45	11:45-12:15	12:15-12:45
HPC1101 進行係： 小林 由子	小山 悟 知識構成型ジグソー法を用いた CBIの実践報告 ——何が学習者の記述に影響を 与えたのか——	飯田 由美 作文の動機調査をもとにした書 く意欲を高める授業デザイン ——日本語中級学習者と日本人 大学生の作文交換活動の試み ——	大竹 春菜 「好きマップ」を活用した自己 表現・他者理解活動 ——タイ中等教育における学習 意欲への効果——
HPC1102 進行係： 小池 直子	中西 久実子 日本語学習者にみられる対比が ある主題の「は」の不使用の問 題 ——中国語を母語とする上級レ ベルの日本語学習者の調査デー タを中心に——	河野 亜希子 「NPがVNだ」構文の容認度に 関する一考察	張 未未 日本語学習者による伝聞表現の 使用実態
HPC1103 進行係： 山崎 誠	伊藤 秀明 日本語の読みから広がる探求授 業	黒木 扶美 思いを言葉にのせるということ ——「映画・ドラマを通して日 本語を学ぶ」の実践報告——	高橋 美智子 ビデオチャットアプリが実現可 能にした 実践的疑似体験学習と参加体験 型学習 ——ZOOMがつかない教育現場 と実社会との接点——
HPC1104 進行係： 岩崎 拓也	高 智子、中井 好男、 荻田 朋子、津坂 朋宏 多様な背景を持つ学習者にとっ て「自己紹介」は簡単なタスク なのか ——「当事者」の葛藤を複線径 路・等至性モデルで描く——	名嶋 義直 日本語教育から民主的シティズ ンシップ教育へ ——社会的行為者の視点から ——	和泉元 千春、野畑 理佳、 小林 浩明 日本語教師によるオートバイオ グラフィーの実践と考察 ——日本語教師の「ことば」を めぐる経験の語りから——
HPC1105 進行係： 楊 韜	Giulio Antonio BERTELLI 【英語発表】 Peregrinations in The Far East The Unpublished Travel Memoirs of Ugo Pisa, a Young Italian Diplomat in China and Japan From 1870 to 1872	魏 鳳麟 【中国語発表】 貝原益軒の文學觀與實學思想	中嶋 英介 『武教全書』周辺文献からみた 忍者教訓
12 階			
部屋番号	11:15-11:45	11:45-12:15	12:15-12:45
HPC1201 進行係： 櫻坂 英子	福田 州平 武者小路公秀の人間安全保障論 の今日的意義 ——日本の多様性と広がる可能 性への視座として——	翁長 志保子 沖縄の日本（復帰）以降におけ る（沖縄人）主体の形成過程の 一考察 ——島尾ミホ作品の再読を通し て——	Joel MATTHEWS 【英語発表】 The Tethered Fates of Japan's “Foreigner” Communities Zainichi Korean Activism and “Nationality Restrictions”
HPC1202 進行係： 高橋李玉香	王 歆昕 中日自他認識に対する仏教世界 観の影響	沼野 凌子 「擬似遺族体験」としての遺骨 収集 ——沖縄における学生戦没者遺 骨収集団の活動を事例に——	高橋 恭寛 徳川時代の庶民教育における儒 学思想の展開 ——往来物や儒学入門書の比較 検討を通して——

2023年11月19日(日) 13:45-15:15

11階			
部屋番号	13:45-14:15	14:15-14:45	14:45-15:15
HPC1101 進行係： 中之内夏美	袁 通衢 日本語学習用のオープン教育資源の構築状況とその利用実態 ——中国本土の大学の日本語学習者を対象に——	佐々木 真実 ディクトグロス活動の実践と分析 ——学習談話に現れる協働作業における学習者の気づき——	李 羽喆、石黒 圭 スマホ「辞書」による語彙検索行動の実態と問題点 ——マカオの初級日本語学習者を事例に——
HPC1102 進行係： 大久保雅子		長田 梨菜 音声コミュニケーションにおいて顕在化される問題と文法的な正しさ ——接触場面の修復、問題源の観点から——	王 伸子 音声表現力と音声観察力の向上を目指す多様なアクティブラーニング ——新しいメディア stand.fm を活用した教室活動——
HPC1103 進行係： 亀崎 晶子	佐藤 遥 『みんなの日本語』導入ビデオが学習スタイルに与える影響 ——HKU SPACEにおけるデジタルコンテンツ活用の事例——	張 元卉 【中国語発表】 大班日語課堂的有效教學設計 ——課上課下のICT實踐——	劉 星 『ビジネス日本語2』のクラスにおけるPBLの実践 ——就職準備活動としてのOB・OGへのインタビュー——
HPC1104 進行係： 高 智子	岩崎 拓也 「やさしい日本語表記」のための一試案	引田 梨菜 ネパール語を五十音図に利用する ——日本語学習をより容易に——	梁 安玉、亀島 裕美、 伊達 久美子 初等日本語教育のための教科書作成プロジェクト ——子供の視点から学べる教科書への取り組み——
HPC1105 進行係： 翁長志保子	澤田 敬人 戦後日本のアカデミズムにおけるオールド・ボーイズ・ネットワーク	纓坂 英子 コロナ禍における特定集団に対する嫌悪的行動の分析 ——在日コリアンを対象として——	楊 韜 演劇人と原爆 ——奈良岡朋子の活動を中心に——
12階			
部屋番号	13:45-14:15	14:15-14:45	14:45-15:15
HPC1201 進行係： 王 歆昕	本村 昌文 神沢杜口における「古い」と〈迷惑〉意識	李 欣 【中国語発表】 日語中的蛇文化	
HPC1202 進行係： 中東 靖恵	小森 万里、藤平 愛美 短期留学生は課題解決型学習(PBL)を通してどのような力を伸ばすのか ——母国および留学先の地域の課題解決に向けて——	山口 顕秀、京 祥太郎 外国人留学生の受入政策の課題について一考察 ——私費外国人留学生を中心に——	齋藤 ひろみ、浜田 麻里 JSL 児童生徒の学習支援活動は教師としての成長をどう促すか ——教員養成課程における取り組みから——

2023年11月19日(日) 15:30-17:00

11 階			
部屋番号	15:30-16:00	16:00-16:30	16:30-17:00
HPC1101 進行係： 高橋 美智子	Masayuki HIRATA 【英語発表】 Text-Generative AI in Language Learning: Assessing its Impact and Advantages over Corpus-based Approaches	Tham Thuy HONG 【英語発表】 Vision of Japanese Language Education in universities in Vietnam within the context of diverse and interconnected world —Promoting Global Competence and Societal Promoting Global Competence and Societal Engagement—	Ruth VANBAELEN、Masaki ONO、Hironori SEKIZAKI、Cade BUSHNELL、Changyun MOON、Anubhuti CHAUHAN、Hiroaki HATANO 【英語発表】 Developing Japanese Language Learning Content for the Japan Virtual Campus Platform
HPC1102 進行係： 永岡 悦子	時野 加奈子 ベトナム人元技能実習生日本語教師の日本での経験が教育実践にどのような影響を与えるか ——日本人コミュニティとの関わりからの一考察——	松岡 英輔 ニカラグアの日本語学習者の考える言語能力と言語学習ビリーフ	田島 ますみ、松下 達彦、佐藤 尚子 日本の大学で学ぶ中国語母語話者と日本語母語話者の日本語力の比較 ——Can-do statementsによる自己評価、語彙力、読解力に着目して——
HPC1103 進行係： 立川 真紀絵	関 元聡 日本語学習者はいかに「わからなさ」に耐えているのか——認知負荷理論の視点から——	盧 叢珊 ネイティブスピーカー (NS) 志向の日本語学習者の第二言語話者としてのアイデンティティ構築 ——主体性のあるアイデンティティに基づく「居場所」の提供——	
HPC1104 進行係： 李 羽喆	中之内 夏美 中国語による影響を受けた日本語の文字表記 ——中華学校に通う小学二年生の場合——	木下 りか、野田 大志 「雅語」と注記される動詞の意味特徴 ——辞書の記述を参照して——	
HPC1105 進行係： 本村 昌文	劉 玲芳 近代日本における花嫁衣裳の変遷 ——20世紀前後の新聞・雑誌を中心に——	永原 順子 地芝居が内包するコミュニティ創成力 ——土佐絵金歌舞伎を例に——	陸 郭人傑、猿倉 信彦、清水 俊彦、篠原 敬人、程 思哲、Jose Eleazar Reynes BERSALES 分光学的手法によるセブ島出土の有田焼陶磁器片分析 ——献上品と日用品の製法の違いについて——

12階			
部屋番号	15:30-16:00	16:00-16:30	16:30-17:00
HPC1201 進行係： 佐々木 真実	大久保 雅子 日本語音韻習得のための自律学 習支援 ——e-learning を活用した有声・ 無声破裂音の聴取練習から——	小林 由子 日本語学習に対するメタ認知を 高めるための内容重視型授業 ——「日本語学習のための心理 学」の実践と評価——	村上 仁、高田 和幸 香港の社会情勢が与える日本語 学習への影響 ——学習動機調査から——
HPC1202 進行係： 徐 揚	李 宗泰 無臭的な日本ポピュラー・カル チャーによるサイノフォニックな 想像空間 ——『ドラえもん』の二次創作 から見る華僑コミュニティーと 香港——	呉 穎濤 戦後日本における中国系亡命者 の文化生活 ——陶晶孫の執筆活動とその亡 命的時間性を事例として——	宮原 暁、岡野 翔太、 高木 泰伸 捨てられる民具 ——高度経済成長期における四 国及びその周辺を中心に——

日本語初級コース Lang1210 における Blended Learning を有効活用したコースデザインの実践
——つながる、機能する、広がる——

The Practice of Lang 1210, the beginner course of Japanese Language designed as Blended Learning
—Connected, Functional, Expansive—

塩見 光二

香港科技大学

要旨

日本語の初級コース Lang1210 における Blended Learning の実践事例を示しながら、「つながる」「機能する」「広がる」学びのデザインを示す。

科学技術の発展に伴い、学び方が時代とともに変容してきている。コロナ禍で Online 授業、e-learning などの教育のデジタル化が大きく進展した。対面型の授業であれ、e-learning 型の学習であれ、それぞれ良さを秘めている。今後の教育活動を考える時、それぞれの良さを融合したデザインが求められると考える。この発表では、e-learning と対面型の授業を通して、学生が「つながる」「機能する」「広がる」学びのデザインを示す。学生自らが e-learning で、教材と向き合い学習を進める。教室では、新しい学習内容について、学生同士が教えあい学びあい理解を深める。興味や関心に応じて学びを自ら広げる可能性を探っていきたい。個別の学生の支援についても検討したい。

キーワード：「つながる」、「機能する」、「広がる」

地域に暮らす外国人労働者にとっての地域日本語教育の役割
——岡山県総社市のベトナム人技能実習生を対象とした調査をもとに——

**The Role of Community-based Japanese Language Education
for Foreign Workers Living in Local Communities:
Based on a Survey of Vietnamese Technical Intern Trainees in Soja City, Okayama Prefecture**

中東 靖恵
岡山大学

要旨

本発表は、岡山県総社市に暮らすベトナム人技能実習生78名を対象に、2017～2018年に行った日本語教育支援に関する質問紙調査の結果と、総社市が開設する日本語教室での参与観察に基づき、地域日本語教育の役割について論じるものである。

外国人労働者における日本語学習の継続困難や学習意欲の低下がこれまでも多く指摘されているが、課題解決に向けた地域日本語教育の役割として、日本語学習、日本人住民との交流を通じた日本語使用・コミュニケーションの促進、他国出身の外国人住民との交流や社会参画の場の提供とともに、それを可能にするための「日本語教育の質」を保証し、行政が主体的に関わる地域日本語教育の体制づくりの重要性を述べる。

キーワード：地域日本語教育、岡山県総社市、外国人労働者、ベトナム、技能実習生

テキストにおける描写視点の変更について
——能動文・受動文の表現効果と機能を視野に——

**The Change of Depiction Viewpoint in the Text:
From the Perspective of the Expressive Effects and Functions of Active and Passive Sentences**

劉 志毅

早稲田大学大学院

要旨

テキストにおける能動文・受動文については、次のように、前文では動作主による動作を「訂正する」（能動態）で表現しているが、後文では能動態（1）か受動態（2）で表現されており、両者は前文と後文の描写視点に差異が見られる。本発表では、連文における描写視点の変更に着目して、「能動文＋能動文」「能動文＋受動文」における、後文の能動文・受動文の表現効果と機能について考察する。

- (1) 県教育委員会は...英語の問題を訂正した。大問5で、...説明した部分について、...と訂正した。（朝日新聞、2023.03.08）
- (2) 県警は2日、...特殊詐欺事件の被害について、...被害額を7536万円に訂正した。架空料金請求詐欺の被害額も...に訂正された。（読売新聞 2023.02.03）

キーワード：連文、能動態、受動態、視点、表現

Peregrinations in The Far East
The Unpublished Travel Memoirs of Ugo Pisa, a Young Italian Diplomat
in China and Japan From 1870 to 1872

極東放浪記——1870—72年に中国や日本を旅した若いイタリア人外交官の未刊回想録

Bertelli Giulio Antonio

Osaka University

Abstract

The main purpose of this paper is to introduce the nature, contents and historical importance of a recently discovered and still unpublished set of Italian primary sources about China and Japan in the early 1870s: the “Peregrinations in The Far East”, written by the young Italian diplomat Ugo Pisa. Pisa was appointed secretary of legation in early 1870, and after travelling in China he reached the Italian legation in Yokohama, where he lived until the spring of 1872. About his travels and experiences in both China and Japan, including a journey in some unexplored areas and Ainu villages of Ezo (Hokkaidō) and in the northern regions of Honshū accompanying the American minister plenipotentiary Charles E. De Long and the young Charles Appleton Longfellow in the autumn of 1871, Pisa wrote about 300 manuscript pages of memoirs, which, as of today, are still unpublished. There are very few Western sources about travels in Japanese regions in this period, as it was forbidden for non-diplomat foreigners to travel freely beyond the treaty borders. Through my presentation, I would like to introduce the main features of this rare and fascinating primary source, and stress its historical significance in the history of Japanese diplomacy.

Keywords : Italo-Japanese relations, Early Meiji Japan, Ugo Pisa, Travel Memoirs, Charles Appleton Longfellow

日本語教育における翻訳の授業
——ペアワーク活動の効果と授業評価を中心に——

Translation Lessons in Japanese Language Education
- Focusing on the Effectiveness of Pair Work Activities and Course Evaluation

結城 佐織

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

要旨

授業の一单元として翻訳を扱った。認知言語学、翻訳論の歴史などに関する読解や翻訳練習、言語学の専門家と英語母語話者による講義を経たのち、課題の英訳についてペアワークを行った。ペアワーク時の教師の主な役割は、日本語の語感を学生に伝えることである。第一言語に関する相互批評であるため心理的負担も軽減され、原文や訳文に対する相互理解を促進した。特に原文理解の修正、英語の語感の違いや語用についての意見交換が盛んであった。授業評価として、学生同士の話し合いが勉強になった、文化的な相違を知るのが面白かったなどがあった。本発表では日本語能力の向上にペアワークを利用した翻訳の授業が効果的であることを主張したい。

キーワード：翻訳論、認知言語学、相互批評、相互理解、語用

異文化理解能力の参照枠を活用した日本語教育の可能性

Feasibility of Japanese Language Education Utilizing the Reference Framework for Intercultural Competence

原 隆幸

鹿児島大学

要旨

2000年以降、欧州評議会から出された「ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）」は、世界の外国語教育に大きな影響を与えてきた。また、社会がグローバル化するに伴い、外国語教育は言語能力の育成だけでなく、異文化理解力の育成も重要視されてきた。そこで本研究では、異文化理解能力の参照枠を活用した日本語教育の可能性を検証していきたい。そのために、国際交流基金から出された JF 日本語教育スタンダードと欧州評議会から出された CEFR と「民主的な文化への能力参照枠（RFCDC）」を比較し、異文化に関する能力記述文を分析する。最後に異文化理解能力の参照枠を活用した日本語教育の可能性について検討する。

キーワード：異文化理解能力、日本語教育、JF 日本語スタンダード、RFCDC、能力記述文

ニカラグアの日本語学習者の考える言語能力と言語学習ビリーフ

Linguistic competence and language learning beliefs of Japanese language learners in Nicaragua

松岡 英輔

香港大学專業進修学院

要旨

1980年代にニカラグアで日本語教育が始まり30年以上が経過した。しかし、管見の限りにおいて、ニカラグアの日本語学習者の言語能力と言語学習ビリーフ（以下、ビリーフ）に関して詳しく調査した研究はない。

そこで本研究においては、ニカラグアにおいて日本語学習者を対象に最も上達させたいと考える言語能力、得意または苦手と考える言語能力、及びビリーフについてアンケート調査を行い、ニカラグアの日本語学習者の特性を分析した。

その結果、会話能力を上達させたく考えている学習者が多いことや日本人との交流や会話を望んでいる学習者が多いことなどが特徴として見いだされた。

キーワード：ニカラグア、日本語学習者、BALLI

知識構成型ジグソー法を用いた CBI の実践報告
——何が学習者の記述に影響を与えたのか——

**A Practical Report on CBI Using the Knowledge Constructive Jigsaw Method:
What influenced learner's description?**

小山 悟
九州大学

要旨

本発表は、「教え合い」と「話し合い」の活動を通して学習者の批判的思考を促す新たな教授法を開発しようとする一連の研究の第3弾である。調査は2023年6月に香港市内の日本語教育機関で行った。過去2回の調査では、(1)聞き手の存在を意識した説明を促すことや、(2)沈黙を減らし、活発な話し合いを引き起こすことには成功したものの、授業の最後に書く「まとめ」には、学習者が批判的に思考できたことを裏付けるような独自の考えや解釈は見られなかった。しかし、今回の調査ではそれを引き出すことができた。本発表では、学習者の書いた「振り返り」の分析などを通して「何が学習者の記述に影響を与えたのか」を考える。

キーワード：知識構成型ジグソー法、CBI、批判的思考

中国における『千と千尋の神隠し』
——中国から見る『千と千尋の神隠し』と『紅き大魚の伝説』——

"Spirited Away" in China
—"Spirited Away" and "Big Fish & Begonia" seen from China—

徐 揚

専修大学文学研究科

要旨

スタジオジブリによって制作された長編アニメーション映画『千と千尋の神隠し』は、日本で公開されてから18年後の2019年に中国本土で初めて公開された。海賊版ビデオやインターネットを通して本作を見たことがある人が多いにもかかわらず、同作はヒットし、旧作とは思えない好成績を記録した。同作は日本を描いているが、多くの赤い提灯などの表現によって、中華圏の文化を想起させる。一方、中国アニメーション映画『紅き大魚の伝説』は中国を描いているにも関わらず、画面や町の雰囲気から『千と千尋の神隠し』に似ていると観客に指摘された。『千と千尋の神隠し』は長年にわたって、中国において大きな影響を与えていたことが明らかとなった。

キーワード：スタジオジブリ、アニメーション映画、中華圏文化

コロナ禍で渡日延期を余儀なくされた留学生はどのように渡日を待っていたのか
——複線径路等至性モデルによる分析の試み——

Coping with Postponed Arrival: How International Students Affected by the Pandemic Waited for Their Entry to Japan - An Analysis Attempt Using the Trajectory Equifinality Model

下村 朱有美

大阪大学日本語日本文化教育センター

要旨

本研究ではコロナ禍の影響を受けて渡日時期が延期となった東欧出身の留学生 4 名のライフストーリーを対象とし、先行きが不透明な状況の中で、どのようにして渡日までの待機期間を過ごしていたのかについて分析を試みる。4 名の対象者は日本留学決定後、渡日時期の延期を経験しており、その中で不安や不満を感じる場面に直面していた。主に入国前の待機期間に留学生の心境や行動に影響を与えた要素について複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model) を用いて分析を試みたところ、待機期間中の就業や学業の状況や、誰と生活をともにしていたかに加え、過去の留学経験やオンライン授業で得られたネットワークが重要な要素として位置づけられた。

キーワード：留学生、COVID-19、複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model)

**Kazuo Ishiguro:
Multidimensions and Paling Effect in His Early Works**

カズオ・イシグロ初期作品の多重性とかすかさの反照性をめぐる一考察

**Shu-tan Lin
Wenzao Ursuline University of Languages**

Abstract

Nobel prize winner Kazuo Ishiguro is a Japanese British writer who claims that his works do not belong to Japanese literature nor to British literature. He writes for world literature. Because of the universal nature of his themes, his “world” needs to be understood from a multicultural and multidimensional perspective.

One of the early novels of Ishiguro, *A Pale View of Hills*, generates a multi-layers reflexive “paling effect” that pertains to cultural phenomenon. Such a technique has been found to have linked up with the so called “Japaneseness.” This presentation will explore whether his other novel, *An Artist of the Floating World*, set with a Japanese background, will yield similar techniques. The variations of which will be probed to see if they reflect aspects of traditional Japanese culture. This is an attempt to investigate the diversity and conventional as well as innovative potentials of Ishiguro’s unique Japanese shadowing.

Keywords : Kazuo Ishiguro, Paling Effect, “Japaneseness,” Diversity

日本語学習用のオープン教育資源の構築状況とその利用実態
——中国本土の大学の日本語学習者を対象に——

The Construction and Utilization of Open Educational Resources for Japanese Language Learning: A Focus on Japanese Language Learners at Universities in Mainland China

袁 通衢

京都大学大学院教育学研究科

要旨

本研究では、日本語学習者の個別学習に資するオープン教育資源（以下：OER）に注目し、中国本土の大学の日本語学習者がアクセスできる OER を分類・整理した上、質問紙調査（有効 N=597）を用いてその利用実態を調査した。その結果、まず、コンテンツに基づき、日本語学習用の OER をツール型・ドリル型・テキスト型・講義型の4種類に分類し、各種類の OER と日本語レベルとの対応関係やその主要な開発側等が明らかになった。また、質問紙調査の結果、OER の利用経験や利用頻度は、OER の種類や学年によって異なることが示された。これらの結果を踏まえ、日本語学習用の OER の開発や利用を促すための示唆を提示した。

キーワード：オープン教育資源、日本語学習者、構築状況、利用実態

日本語学習者にみられる対比がある主題の「は」の不使用の問題
——中国語を母語とする上級レベルの日本語学習者の調査データを中心に——

The problem of non-use of "wa" by Japanese language learners: Focusing on survey data of advanced-level learners of Japanese whose mother tongue is Chinese

中西 久実子
京都外国語大学

要旨

日本語学習者の「は」「が」の習得については、「先行研究でも習得が難しいとされ、正判断率も比較的低いもの」として対比を表す「は」などが挙げられている（坂本正 (1998:499)）。しかし、その分析に使用されている調査データには単純な作例の短文が使用されており、複雑な長文を使った先行研究は管見の限りない。本研究では、中級・上級レベルの学習者が書いた博士論文や作文など複雑な実例の長文を対象として調査を実施した。分析の結果、対比がある主題の「は」の不使用が様々な言語を母語とする学習者にみられ、中間言語として特徴的であることがわかった。本発表では中国語で対比がどのように表されるかも考察し、中国語を母語とする学習者に関しては「は」の不使用に少なからず母語からの影響があることを指摘する。

キーワード：主題、対比、「は」、日本語学習者、不使用

演劇人と原爆

——奈良岡朋子の活動を中心に——

Theater Performer and Atomic Bombing of Hiroshima: Focusing on the activities of Tomoko Naraoka

楊 韜 YANG Tao

佛教大学 Bukkyo University

要旨

1945年8月6日の広島被爆は、人類史上におけるもっとも悲惨な出来事だった。戦後、長田新編『原爆の子』や井伏鱒二原作『黒い雨』をはじめ、原爆体験を綴った文学作品、およびそれらに基づいてアダプテーションされたメディアコンテンツは多くの人々によって受容されてきた。報告者は、演劇人の故・奈良岡朋子の活動に注目し、その実態と特徴を考察する。一演劇人の生涯を通じて、戦後日本における原爆体験記憶の歴史的脈絡を整理し、そこに見られる社会的背景と潜む人間性を見出せたい。

キーワード: 演劇人、原爆、奈良岡朋子、『原爆の子』、『黒い雨』

作文の動機調査をもとにした書く意欲を高める授業デザイン
——日本語中級学習者と日本人大学生の作文交換活動の試み——

**Motivation as a Viewpoint: A Course Design that Aims to Motivate Intermediate JFL Learners
A Composition Exchange Project between Hong Kong and Japanese Students**

飯田 由美

香港中文大学專業進修学院

要旨

本発表では中級学習者を対象に書くことへの動機を調査し、その結果をもとに、日本人大学生と作文交換を行った実践報告を行う。調査1では、書く能力を上達させたい動機や目的は何か、2018年と2023年に111人を対象に質問紙法を用いて調査を行った。その結果、87.4%の学習者に内発的動機付けが確認された。調査2では日本人大学生と作文交換を行い、コメントを送り合うという活動を通して、どのような気づきを得ているのか半構造化インタビューを11名に実施した。結果、言語形式と話題選択にいつもより気を付けて書いたこと、45.5%が活動後も読み手を意識して書くようになったことが判明した。これらの結果から、書く意欲を高める授業について考察する。

キーワード：第二言語の作文、動機づけ、自己効力感

日本語と中国語における構文の長さや丁寧さの関係についての一考察

A Consideration of the Relationship between Sentence Length and Politeness in Japanese and Chinese

山崎 誠
流通科学大学

要旨

日本語の敬語は文化審議会の答申で尊敬語、謙譲語、丁重語、丁寧語、美化語の5種類あると解説されており、また人称に対する言葉や敬語動詞も多い。これらは日本語学習者が難しさを感じる点であろう。そのほかに曖昧さが持つ意味合いから、長い文を最後まで言わずに余韻を持たせ、短い文で丁寧さを表すことがある。

それに対して現代中国語は敬語を構成する言葉は多くないが、「抱歉」や「能不能」などの言葉を使うと丁寧さを感じる。その孤立語という言語的特徴から、これらのマーカーを増やすことで文が長くなり丁寧さを調節しているという点に着目し、敬語の構文と丁寧さの関係において、「構文の長さ」が丁寧さの指標になり得ると考えた。

キーワード：言語学、敬語、日本語、中国語、日本語教育

スポーツメガイベントと日本語テキスト・会話集

Sports mega-events and Japanese textbooks and phrasebooks

清水 泰生

同志社大学

要旨

日本は過去にスポーツイベントが多く開かれた。東京五輪 1964、ワールドカップ日韓大会、東京 2020 などである。東京 2020 が終わった現在でもこれから、世界陸上 2025 東京大会。アジア大会 2006（愛知・名古屋）などが開かれ、多くの外国人が来日する予定である。また、東京マラソンなどで外国人の選手が毎年来日する。

本発表ではスポーツイベント等でやってくる外国人のための日本語テキスト・会話集等の構想およびそれらの作成等について報告したい。まず、清水（2015）の「東京五輪日本語会話テキスト構想」等で考えたものを紹介し、それから、現在、作成中のアジア大会 2026（愛知・名古屋）と東京マラソンの日本語テキスト・会話集等について取り上げてみたい。

キーワード：スポーツイベント、日本語会話集、テキスト、アジア大会、東京マラソン

貝原益軒的文學觀與實學思想

貝原益軒の文学観と実学思想

魏 鳳麟

廣東外語外貿大學日語語言文化學院

要旨

江戸儒者貝原益軒秉承了儒家“溫柔敦厚”“文以載道”的詩文觀,他認為優秀的詩歌可以陶冶心性,發揮勸善懲惡的教化功能。同時,他主張漢詩不適宜日本的風土,對無作詩天賦的日本人而言,耗費心力作漢詩是無益之舉。此外,他認為小說中包含有天文、地理、人事、鳥獸、草木、醫藥等實用知識,為學之人可以通過閱讀小說拓寬知識面,但不可專好小說而輕視經學與史學。貝原益軒的文學觀體現了其經世致用的實學思想。

關鍵字：貝原益軒, 儒家詩文觀, 經世致用, 實學思想

日本語学習の入り口としての日本文化相撲の多角的側面
——海外相撲ワークショップ実践報告——

Multifaceted Aspects of Japanese Cultural Sumo as an Entrance to Japanese Language Learning
—Report on Sumo Workshops conducted overseas—

戸田 隼介
専修大学

要旨

本発表は、日本語学習者を対象とした、日本文化としての相撲の紹介活動報告である。具体的には、日本語学習の入り口として、日本語学習者を対象に行なった海外における相撲ワークショップの実践報告である。

相撲は食文化、歴史、語彙など、日本語教育の素材の要素を多く含んでいる。例えば「土俵際」や「揚げ足を取る」などの語彙や、「手刀を切る」などの所作のように、日本の言語行動に取り入れられているものも少なくない。また、多様化する学習者を想定した際にも、文化、宗教背景を考慮した形で実施することも可能である。このように相撲は、多角的な側面から日本語の入り口として活用できる素材であるということを述べる。

キーワード：日本文化、相撲、日本語学習の入り口、学習者の多様化、実践報告

**The Tethered Fates of Japan’s “Foreigner” Communities
Zainichi Korean Activism and “Nationality Restrictions”**

在日「外国人」コミュニティの結ばれた運命
在日コリアン社会運動と「国籍条項」

Joel Matthews

Tokyo Metropolitan University

Abstract

Postwar Zainichi Korean activism for legal, social, economic, educational, ethnic, constitutional and welfare rights began almost immediately after Japan was placed under Allied Occupation in late 1945. However, it wasn’t until the 1970s and 80s in which most Koreans in Japan started to consider themselves as true “residents (jūmin)” of Japan, with a vested interest in securing that future in Japan. Zainichi Korean scholar Sonia Ryang (2023) characterizes this shift as: “Faced with the ongoing prospect of national partition, which made eventual homecoming more and more unlikely, the overwhelming cultural and linguistic proficiency in Japan, and, conversely, the lack of Korean cultural and linguistic proficiency or, more directly put, the lack of emotional connection to the Korean peninsula, they began to identify themselves more as zainichi than as chōsenjin or kankokujin.” (7) During this period, both Zainichi Korean activism and the ratification of international human rights and refugee conventions pressured the Japanese government to remove the “nationality” requirements from numerous social welfare programs, meaning that foreign nationals became eligible for public housing, housing loans, the national pension plan (nenkin), childcare allowances and national health care. The removal of these nationality requirements for social welfare and public employment provided the foundation for contemporary “foreign” residence rights that both oldcomer Zainichi Koreans and all newcomer foreign residents rely on. This presentation will investigate the Zainichi Korean activism for residence rights, the history of social welfare program nationality restrictions, and evaluate Japan’s “multicultural coexistence (*tabunka-kyōsei*)” policy in light of it.

Keywords : “Foreign” Communities, Zainichi Korean activism, nationality restrictions, Multicultural coexistence (*tabunka-kyōsei*)

日本語の読みから広がる探求授業

Inquiry Class Expanding from Japanese Reading

伊藤 秀明

筑波大学

要旨

近年、言語教育におけるテクノロジーの活用がめざましい発展を遂げている一方で、生成 AI などの登場により教育現場を介さずとも言語知識は得やすくなっており、教育現場を介した言語教育自体の意味が問われるようになってきている。本発表では、これらを背景にこれからの時代を生きるために必要な能力の一つとして「探求」を挙げ、日本語の読み物を通した探求授業の設計およびその授業内容を提示する。

読みを通した探求授業では、毎回の読み物から派生し、社会的・抽象的なテーマについて学習者間、教師と学習者間の相互作用を繰り返す中で、人間の複数性を意識するとともに多様な思考や経験を身につけることをめざしている。

キーワード：探求、多様な思考や経験、複数性、協働学習、学習環境

思いを言葉にのせるということ

——「映画・ドラマを通して日本語を学ぶ」の実践報告——

To Articulate Thoughts into Words

Practical Report: Learning Japanese through Movies and Dramas

黒木 扶美

香港大学專業進修学院

要旨

香港大学 SPACE では長年、日本語上級者のための「映画・ドラマを通して日本語を学ぶI」「映画・ドラマを通して日本語を学ぶII」クラスが開講されてきた。本発表では

1) 授業の目的と流れ～例 映画『あん』(2015) を使って

2) コースを終えた学生のインタビュー内容

を紹介する。本コースでは日本の第1次産業、病気による差別、村おこしなど学生になじみの薄いトピックについての理解を深め、語彙や聴解力の強化を図っている。また、定期的にディスカッションの時間や作文の宿題があり、学生が自分の意見や思いを伝える機会を設けている。インタビュー内容から見えてくるコースの意義や課題、思いを言葉にのせる活動を通して気づいたことに触れる。

キーワード：映画・ドラマ、上級、実践報告、思いを言葉にのせる

武者小路公秀の人間安全保障論の今日的意義
——日本の多様性と広がる可能性への視座として——

**Contemporary significance of Kimihide Mushanokoji's theory of human security— A Perspective on Japan's
Diversity and Igniting Potentials**

福田 州平

香港大学專業進修学院

要旨

日本では、現在、安価な労働力確保の手段とされている技能実習制度、認定数が少なすぎると批判される難民認定の問題、さらには入管当局の人権意識など、多様性をもった社会に変わっていく過渡期にあるとはいえ、課題が少なくない。そもそも、日本のどこに根本的な問題があって多様性が阻害され、そしてどのような姿勢が求められるのだろうか。このような課題に取り組んだ研究者は少なくないが、本発表では、国際政治学者・武者小路公秀（1929-2022）の国際社会科学、特に人間安全保障論を中心に上げる。そして、多様性と広がる可能性という本大会のテーマに沿って、武者小路の理論の考察を試みたい。

キーワード：人間安全保障、不安全、共同体、文明間対話、和

How do students who study Japanese endure "the state of incomprehension"?:

Exploring from the viewpoint of Cognitive Load Theory

日本語学習者はいかに「わからなさ」に耐えているのか

——認知負荷理論の視点から——

Motoaki Seki

The University of Hong Kong, School of Professional and Continuing Education

Abstract

Language learning has a side that the learners must endure the state of incomprehension, specifically when learners are beginners. For example, they may be confused when overwhelmed by a large amount of linguistic information from native users. Also, learners may unintentionally stop speaking because they lack linguistic skills. To ensure such a state may force the learners extremely challenging depending on the learner's mental state, and the process of managing the moments and periods seems to vary individually. This qualitative and interpretative research will explore how learners who study the Japanese language in an adult education institution in Hong Kong (HK) handle "the state of incomprehension" from a theory called Cognitive Load Theory (CLT). CLT is championed by Sweller (1988, 2002, 2017) and features that the learning capacity depends on the learner's working memory capacity. Working memory is defined: "[A] system for temporarily storing and managing the information required to carry out complex cognitive tasks" (MedicineNet, 2019). Therefore, according to the theory, the learner's working memory is constantly consumed by the highly active cognitive response when they are in "the state of incomprehension", and whether the learners can endure the state depends on their working memory capacities. A focus group interview is employed as a data collection method, and theme analysis is conducted to identify the adult learners' strategies to manage "the state".

Keywords: Cognitive Load Theory (CLT), working memory, Japanese language, students' endurance strategy

「みんなの日本語」導入ビデオが学習スタイルに与える影響
——HKU SPACEにおけるデジタルコンテンツ活用の事例——

**The impact of Introductory Videos for textbook “Minna No Nihongo” on Learning Styles
— A Case Study of Digital Material Utilization at HKU SPACE —**

佐藤 遥

香港大学專業進修学院

要旨

近年、教育現場でのデジタルコンテンツの活用が進んできた。香港大学專業進修学院（HKU SPACE）では、2020年から「みんなの日本語初級1・2」の学習内容に沿ったオリジナルの「導入ビデオ」を制作し始めた。これらのビデオを学習者が視聴することで、教室内外の学習スタイルにどのような影響があるかを検証した。ビデオ制作が遅れたため、学習者への影響を十分に検証できなかったが、日本語コースのデジタル教材を拡充することで自律学習を促進できる可能性や、学期休み中にビデオを視聴して復習や次のレベルへの橋渡しになる可能性が示唆された。

キーワード：デジタルコンテンツ、自律学習、学習スタイル、導入ビデオ、みんなの日本語

『もののけ姫』における自然観
——『羅小黑戦記 ぼくが選ぶ未来』との比較を通じて——

李 昕雨 (LIXINYU リシンウ)

専修大学 文学研究科 日本語日本文学専攻

要旨

宮崎駿の作品『もののけ姫』（1997年）は自然界と人間社会が関連しているであることを暗示し、映画の終盤で「共に生きよう」という共生主張を提出した。中国漫画家、アニメーション監督である MTJJ の（アニメーション）映画『羅小黑戦記 ぼくが選ぶ未来』（2019年）は中国国内での興行収入が49億になり、日本でも上映し、高い評価を得た。また、この作品には人間と自然の共生関係について描き、宮崎駿から影響を受けていると指摘されている。本発表では『もののけ姫』と『羅小黑戦記 ぼくが選ぶ未来』の二作品の自然観の比較分析を通じて、自然に対して慎重に認識し、自然との共生関係を考えることが本研究の意義である。

キーワード:宮崎駿、『もののけ姫』、『羅小黑戦記 ぼくが選ぶ未来』、自然観、比較研究

大班日語課堂的有效教學設計
——課上課下的 ICT 實踐——

多人数クラスにおける日本語授業の授業デザイン
——授業内外の ICT 活用——

張 元卉
北京理工大學

要旨

每年在中國大陸地區都有大批新增的日語學習者。其中既包括中等教育階段的日語應試者，也包括高等教育的二外學習者。基於這壹背景，有必要對多人數的日語課堂進行有效教學設計。ICT 教育教學的應用與實踐，即如何將信息技術手段與教學進行深度融合，是多人數日語課堂有效教學設計的重要問題點。教學設計的核心，是通過反轉課堂等課堂形式，來構建靈活運用 ICT 的智慧學習環境，在此基礎上運用智慧教學法來輔助學生完成智慧學習。也就是說，以構建多人數日語智慧課堂為核心導向，在明確本門課程的培養目標和預習學習成果後進行完整的教學設計。

關鍵字: 1, 教學設計 2, 大班日語課堂 3, ICT 教育教學 4, 智慧教育

「NPがVNだ」構文の容認度に関する一考察

A Study on the Acceptability of noun-predicate "NP is VN" sentences

河野 亜希子

福岡工業大学

要旨

動詞述語文「NPをVている」から名詞述語文「NPがVNだ」への言い換えについて、「成績が伸びないのを悩んでいる」⇔「成績が伸びないのが悩みだ」は容認されるが、「病院へ行くのを迷っている」⇔「病院へ行くのが迷いだ」は容認されない。「悩む」「迷う」は動詞の一般的な分類（活用・自動詞と他動詞・意志動詞と無意志動詞・能動詞と所動詞 など）、あるいは意味的な特徴から見ても同一に属するものである。にもかかわらず、容認される／容認されないという違いが生じるのはなぜなのか。本発表では、書き言葉コーパスを用いて「悩む」「迷う」と同類の動詞を含む例文を分析した上で、これらの容認度に関する共通点と相違点を明らかにしていく。

キーワード：動詞述語文、名詞述語文、名詞化、書き言葉コーパス

UKPSF で審査を受けた専門日本語分野に関する考察

A Consideration on Technical Japanese Fields which were Reviewed in UKPSF

水崎 泰蔵

Suranaree University of Technology

要旨

本研究は英国高等教育教授・学習開発機関である Advance HE が定める全英教育職能の基準枠組み (UKPSF) における専門日本語 (以下専門) および非専門日本語 (以下非専門) の審査について考察を行う。Fellowship 制度の審査結果 (以下査読) を用い、Fellow 候補者が提出した「大学に貢献した教育活動と業績」(以下業績) の査読傾向を分析する。

査読で採択となった業績のうち専門が 4 分野。非専門が 6 分野であった。一方不採択となった業績は専門が 2 分野。非専門が 5 分野であった。採択となった専門と非専門の報告分野別に見ると、基礎研究よりも成果重視の傾向が認められた。一方、質保証の目的が従来の業績評価基準に異を立てる点は学習者の賛同を得られると考える。

キーワード : UKPSF、Fellow、質保証、高等教育、専門日本語

「好きマップ」を活用した自己表現・他者理解活動
——タイ中等教育における学習意欲への効果——

**Self-Expression and Understanding of Others Activity Using “SUKI MAP”:
Effects on Learners' Motivation in a Secondary School in Thailand**

大竹 春菜
筑波大学大学院生

要旨

海外の中等教育機関における第2外国語科目は、言語の習得以上に人間教育の役割が重視されるものである。言語能力に偏重せず、学習者が持つスキルや個性、興味を引き出し学習意欲を高める教室活動について検討したい。本発表では、タイの中等教育機関で選択科目として日本語を学ぶ中高生を対象とした「好きマップ」の実践について報告する。自身の好きなものを書き出してマップ化し、それについて他者と共有するという活動である。(1)自己表現に使える日本語を学ぶこと、(2)自己理解を深め特技を活用すること、(3)他者理解を深め学びやすいクラスの雰囲気作りをすること等を目的に活動を行い、学習者からも肯定的な評価を得た。

キーワード：好きマップ、海外中等教育、教室活動、自己表現、学習意欲

日本語母語話者教員と非母語話者教員の作文添削
——中国の大学の作文授業担当教員へのインタビューから——

**Points for Native and Non-native Japanese-speaking Teachers to Determine the Need for Correction:
Interviews with Teachers of Japanese Composition Courses at Chinese Universities**

小池 直子
北京理工大学

要旨

中国の大学で日本語作文を指導する母語話者教員（JT）、非母語話者教員（CT）にインタビューをおこなった。「修正の判断」に話題が及ぶと、JTの発話には「違和感」「将来」「進学」「困らない」、CTの場合は「自分」「気持ち」「水準」の語が共起する特徴が見られた。修正を加えるかどうかの判断が必要になると、JTは日本人との交流や大学院進学など学生の将来を考慮し、CTは自身の経験に照らし学生の現況や心理に配慮する傾向があることがわかった。またインタビュー中、JTの多くが「文章観」に関する日中の違いに言及したが、その相違を否定的にとらえず、場面に応じて多様性を尊重すべきだというビリーフを示した。

キーワード：日本語作文、添削、母語話者教師、文章観、ビリーフ

日本語学習者による伝聞表現の使用実態

Exploring the Use of Reported Speech Expressions among Japanese Language Learners

張 未未

東京大学グローバル教育センター日本語教育部門

要旨

伝聞表現の習得は、コミュニケーション能力の向上に必要不可欠であり、文化的な理解の深化にも寄与するものである。本研究では、『課題別会話コーパス』を用いて、日本語学習者による伝聞表現の使用特徴とその問題点を探る。具体的には、「伝言の伝達」課題における日本語学習者の発話例から、伝聞表現が用いられる状況とその形式を詳細に分析し、誤用や不適切な表現の特性を検討する。さらに、日本語母語話者が好む表現との比較を通じて、両者の違いを明らかにする。その結果をもとに、日本語教育現場での具体的かつ効果的な指導法の開発につながる提案を試みる。

キーワード:伝聞表現、日本語学習者、『課題別会話コーパス』、使用実態、指導法

社会人を対象とした高級日本語コース・プログラム
——成人学習者の知識欲を満足させる教材を——

Advanced Japanese Language Program for Adult Learners

村上 純一

香港日本文化協会日本語講座

要旨

日本語講座のコアコースのうち、「研究課程」は20年を超える長い歴史を擁する社会人向け日本語証書クラスである。本課程は当初より日本語能力試験2級・1級の対策は行わないカリキュラムで、真に使える日本語、また名称が示す通り学習を通じた日本社会・文化の深い理解を目標としている。対象となる学習者（主に社会人）に実質N1以上の読解教材を使った日本語文法演習、聴解問題などを行うだけでなく、歴史、伝統文化、流行、昨今の社会問題、経済トレンドなど様々な事象を取り上げ討論し、幅広く日本に関心をもってもらうことにより関連教材から学ぶ言葉の定着促進を工夫している。このコースの授業内容の例を発表でご紹介したい。

キーワード:高級課程、成人学習者、知識欲、学習の成果

ディクトグロス活動の実践と分析
学習談話に現れる協働作業における学習者の気づき

Implementation and Analysis Report of Dictogloss as a Language Learning Method, Focusing on Learners' Awareness.

佐々木 真実
カールトン大学

要旨

本研究では第二言語習得のプロセスに必要なインプット、アウトプット、学習者の気づきを同時に行い促進できる学習方法（文章復元法）ディクトグロスの実践と分析を行う。この実践はカナダの大学における初級・中級の日本語学習者を対象に行われた。本研究では学習者の気づきに焦点をあて、協働作業中の学習談話の分析を通じてディクトグロスの効果を探る。本発表では、活動のプロセスを概説し、復元したテキストから学習者の理解、産出、気づきを分析し、学習談話の分析により、ディクトグロス活動中に観察された理解やひらめきの瞬間などの事例を紹介する。

キーワード：ディクトグロス、文章復元法、協働作業、学習談話、気づき

宮崎駿のアニメーション映画における現地化と〈視覚的叙述〉

——英語吹替版を対象として——

Localization and Visual Narrative in Hayao Miyazaki's Animation Films

: The Case of the English Dubbed Versions

米村 みゆき

専修大学

要旨

商業的な成功とスタジオ経営による作品のクオリティを両立させてきた宮崎駿監督の映画については、国内外において研究の蓄積があるが、同一言語内で議論される状況にある。この事実は、研究の進展の妨げとなっているが、研究の相互交流以前に課題がある。というのは、英語吹替版をみると、科白に多くの変更が加えられており、言語別に視聴者が異なる物語を受容していることが想定されるからである。議論を活性化させるためには、まずは各言語の映画テキストの特徴を理解することが必要条件である。本発表では、宮崎駿に特徴的な〈視覚的叙述〉——言語に妨げられない共通部分を視野に入れ、言語圏の差異がもたらす物語の受容状況を考察する。

キーワード：宮崎駿、現地化、ローカリゼーション、英語吹替、視覚的叙述

戦後日本のアカデミズムにおけるオールド・ボーイズ・ネットワーク

The Old Boys Network of Japanese Academism after the Second World War

澤田 敬人

静岡県立大学

要旨

第二次世界大戦後の日本の大学や学協会において男性の教員が中心となって運営を進めた結果、男性中心のコミュニティが構築されていることを、大学や学協会が発行する機関誌に掲載した記事を根拠資料として実証する。大学版のオールド・ボーイズ・ネットワークが構築されているといえ、特徴としては、暗黙的に成立する非公式な組織構造でありながらも、機関誌への記事への執筆などによりアカデミズムの状況を言語化するに際しては、明瞭な形として表現されていることを読み解く。その人間関係が学問をする組織の中心となり日本アカデミズムの風土や暗黙の了解などの学者間のルールを形成し、現下の女性の活躍を阻む壁となっていることを示す。

キーワード：ジェンダー、マスキュリニティ、知識、日本アカデミズム、構築主義

エアポート・タラップ・ファイナルコール
——消えゆく心象風景—角松敏生作品を中心に——

Airport, Ramp, and Final Call
—Disappearing Imaginary Scenes — Focusing on Toshiki Kadomatsu's Works—

齊藤 穂高

神戸大学大学院 国際協力研究科 博士後期課程

摂南大学 国際学部 非常勤講師

要旨

我々はいつから、そしてなぜ、空港を単なる移動の場としてのみ認識し始めたのだろうか。遡ること1980年代、空の旅は現代ほど一般的ではなかった。しかしそれと引き換えに、人々は空港や空の旅を出会いや別れ、恋愛と結びつけ、大衆音楽、特にシティ・ポップを通じ、さまざまな情景を歌ってきた。中でも角松敏生は、作品の中で多く空港や空の旅をモチーフとした詞を生み出し、昨今では国内外で再評価されつつある。本発表では、角松敏生の作品に注目し、詞の中で空港や空の旅をどのように表現してきたのかを検討する。そして、時代の移り変わりとともに、空港というモチーフ自体が、歌詞の中で語られにくくなりつつある点について考察する。

キーワード：日本人と空港、心象風景、シティ・ポップ、観光文化、角松敏生

『武教全書』周辺文献からみた忍者教訓

Ninja Lessons Seen from Documents Surrounding “Bukyo Zensho”

中嶋 英介

東北大学（日本）・西安外国語大学

要旨

近年、忍者（Ninja）を学問的に検討する「忍者学」研究が盛んに行われている。その手法はアニメや小説、歴史学等様々だが、本発表では山鹿素行『武教全書』（明暦 2〔1656〕年）の忍者教訓を考察する。『武教全書』には「斥候」・「用間」の項目に敵地密偵や忍者の心構え等の教訓が散見される。ただしその多くは項目の明記にとどまるため、後世数々の注釈書が成立した。特に幕末期の武道家窪田清音(1791～1866)は『武教全書』の注釈書『武教全書義解』・『武教全書正解』、さらに集大成として『武教全書詳解』を著し、山鹿流兵学と向き合い続けた。本発表では『武教全書詳解』等を軸に、山鹿流兵学の語りと多様な忍者教訓の展開を検討することで、兵学思想史研究の新たな可能性を見出したい。

キーワード：兵学、忍者、日本思想史、武教全書、窪田清音

沖縄の日本〈復帰〉以降における〈沖縄人〉主体の形成過程の一考察
——島尾ミホ作品の再読を通して——

**A Study of the Formation of the Okinawan Subject since Okinawa's Return to Japan
—Through a Rereading of Miho Shimao's Works—**

翁長 志保子

琉球大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程／高知工業高等専門学校

要旨

1972年、米国による占領統治から逃れるため、日本への〈復帰〉を目指す人々の傍らに、〈復帰〉そのものを問い直そうとする反復帰論者らがいた。彼らに大きな影響を与えた島尾敏雄の「ヤポネシア論」は、敏雄の個人的経験を土台にして醸成され、国家の枠組みに囚われない独自の思考をもたらすとともに、歴史的暴力を隠蔽する効果を不可避的に孕んでいる。本論では、敏雄の妻である島尾ミホの作品『海辺の生と死』（74年）、『海嘯』（83～84年に連載）、『祭り裏』（1987年）を取り上げ、前近代の文脈で読まれ、狂気を神秘化されるミホの作品を再読することを通して、復帰以降の〈沖縄人〉主体が形成されていく過程について論じる。

キーワード：沖縄近現代文学、島尾ミホ、反復帰論、女性文学、南島論

「やさしい日本語表記」のための一試案

A Tentative Plan for the Written Representation of Easy Japanese

岩崎 拓也

筑波大学

要旨

本発表では、「やさしい日本語」のガイドラインを取りあげ、ふりがな（ルビ）や分かち書き、読点といった日本語表記にかんする記述がどのようにまとめられているのかその実態を示す。そのうえで、「やさしい日本語」における表記の問題点と、「やさしい日本語表記」の必要性・重要性について述べる。今回の分析の結果、ガイドラインが発行された時期には多少の違いがあるものの、表記方法についての記述には、取りあげられている項目の違いや内容の詳述の度合いに差がみられた。ふりがな（ルビ）や分かち書き、読点といった見やすさやわかりやすさにかんする要素をどのように示すとよいのか、簡単な実験を行った結果をもとに一試案を挙げる。

キーワード：やさしい日本語、日本語表記、ルビ、句読点、分かち書き

Are there different degrees to perfection in different languages?

A comparison between Japanese, English, and Romanian

日本語と英語とルーマニア語における「完璧」とその程度性

CIOLCA Raluca Maria

Center for Japanese Language and Culture, Osaka University

Abstract

Is perfection perceived differently based on the language? In broad terms, when referring to something as “perfect”, we imply that it is without flaw, or it possesses the highest level on the scale of a certain desirable trait. Thus, the natural conclusion is that there should be no degree higher than that denoted by “perfect” itself. Nonetheless, in Japanese, phrases such as *motto kanpeki* or *yori kanpeki* ‘more perfect’ are frequently used. In English, the equivalent even appears in the Preamble of the Constitution, in the form “a more perfect Union”. On the other hand, in Romanian, the use of the comparative in *mai perfect* ‘more perfect’ is seen as ungrammatical. This, however, does not mean that the phrase is not employed by native speakers of Romanian. This presentation analyzes the way “more perfect” functions in the three languages from the point of view of gradability. The main aim of the presentation is to clarify whether the abovementioned phrases, which appear identical in terms of structure, are motivated by different mechanisms in each language. The topic of ungrammaticality will also be touched upon, with focus on the way such phrases should be introduced in language classes, for both native speakers and non-native learners.

Keywords: Gradability, Scales, Boundedness, Standards, Comparative

日本語継承語学習者と外国語日本語学習者が学び合える
トランスランゲージング・スペースに関する教育実践の報告
——香港における取り組み——

Translanguaging Space where JHL and JFL learners can actively engage in learning of Japanese Language and Culture

明石 智子
香港理工大学

要旨

近年日本語学習者の多様性が多く指摘される中で、多様な学習ニーズ、言語的背景の学習者たちが互いに学び合える学習環境をどうすれば作り出せるだろうか。日本語教育は一般的に「外国語としての日本語教育」「第2言語としての日本語教育」「継承語としての日本語教育」といった領域である種分断され研究・実践が進められているが、教室実践において積極的に連携していくことで、さらに可能性が広がるのではないかと考える。本発表では、香港で継承語として日本語を学ぶ小中高生と外国語として日本語を学ぶ大学生を対象に行っているワークショップの教育実践を報告し、トランス・ランゲージング・スペースの概念を基に言語的背景や日本語力の異なる学習者同士が互いに学び合える場となるような学習環境を作る上での課題や可能性について考察する。

キーワード：トランス・ランゲージング、日本語継承語学習者(JHL learners)、日本語外国語学習者(JFL learners)、アクティブラーニング、協働学習

「中心」與「邊境」：佛教世界觀對中日自他認識之影響

中日自他認識に対する仏教世界觀の影響

王 歆昕

廣東外語外貿大學

要旨

佛教是東亞世界廣泛流傳的普遍主義宗教，其世界觀對中國和日本的自他認識都產生了一定影響。中國在佛教世界觀下發現“他者”，從“華夏中心”轉向一種更具多元性、普遍性的文化觀、文明觀，這在之後成為吸收異文化時的重要思想資源。日本在佛教世界觀影響下產生一體兩面的自他認識，一方面是“粟散邊土”的劣等感，另一方面則是“三國”關係中以日本為中心的自我肯定意識，這一自我肯定意識在喪失普遍基準的近世後期不斷膨脹，最終形成宣揚日本絕對性的自民族中心主義。佛教世界觀，為中國發現“他者”的存在，為日本提供確認其民族獨自性的根據，作為東亞世界共同思想資源的佛教，在中日兩國自他認識發揮著不同作用。

關鍵字：佛教世界觀；自他認識；華夏中心；三國；邊土

日本で学ぶ留学生のための異文化理解教育の実践と教材の開発
——授業評価アンケートの分析から見えてきたもの——

**Development of Class and Materials about Cross Cultural Understanding for foreign Students in Japan:
Issues Identified from Student Class Evaluation Questionnaires**

永岡 悦子
流通経済大学

要旨

近年、日本では国際化を背景に、多文化共生や異文化理解に関するワークブックや教材が出版されている。しかし、多くが日本人読者を想定して書かれているため、語彙や文章の難易度が高く、テーマや事例も日本人の立場からの設定が中心である。本発表では、外国人留学生をはじめ、日本語を母語としない人の視点に立ち、日本語と日本文化を学習者の母語や文化との比較しながら、異文化理解を学ぶ実践と教材の開発について述べる。実践の授業評価アンケートの結果から、言語や文化の比較をきっかけとして他者や他者の文化に対する理解や寛容性も高まると同時に、学習者自身の生き方や考え方などの自己理解も深まることが示唆された。

キーワード：異文化理解、言語・文化の比較、授業評価、自己理解、他者理解

音声コミュニケーションにおいて顕在化される問題と文法的な正しさ
——接触場面の修復、問題源の観点から——

**What are the Trouble and Grammatical Correctness that Appear in Speech Communication?:
From the Viewpoint of Repair and Trouble Source in Contact Situations**

長田 梨菜
早稲田大学

要旨

本研究では、接触場面の音声コミュニケーションにおける「修復 (repair)」と「問題源 (trouble source)」に着目し、会話参加者が顕在化した問題を明らかにした。その結果、(1) どのような言語的な要素を問題とみなすのか、(2) 誰の発話を問題とみなすのかについて、日本語母語話者と日本語学習者の間には傾向の相違があることが分かった。加えて、(3) どのように問題とみなすのかについての知見から、音声コミュニケーションでは、文法的な正しさは文法規則が用いられた結果として現れることを踏まえ、日本語教育における文法的な正しさの扱いについて考察した。

キーワード：文法的な正しさ、音声コミュニケーション、修復、問題源、接触場面

コロナ禍における特定集団に対する嫌悪的行動の分析
——在日コリアンを対象として——

**An examination of aversion behavior towards specific groups in the COVID-19 pandemic :
Case study of Zainichi Koreans in Japan**

櫻坂 英子
駿河台大学

要旨

2020年4月、COVID-19感染拡大で日本の7都道府県で緊急事態宣言が発令された。COVID-19禍初期に発表された社会学や心理学の知見では、COVID-19禍状況での人々の行動や態度の説明に行動免疫システム(Murray, D.R., et al., 2007;)が援用された。しかし生存率を高めるための感染予防行動は外集団に対する排斥的態度を誘発したことも事実である。本研究では日本人にとって文化的な外集団である在日コリアンへのCOVID-19禍と関連付けされた嫌悪的行動を、ウトロ放火事件等を例示しながら、特定集団へ差別的行動として報告する。

キーワード：COVID-19禍、感染予防行動、在日コリアン

現代日本語の文末表現「くない？」の婉曲的機能
——新ぼかし表現の一例として——

The Function of Sentence Ending “kunai?” As an Expression of Consideration in Modern Japanese

鈴木 梓

福井大学地域創生推進本部附属創生人材センター特命助教

要旨

現代日本語では、共感の目的で文末表現「-くない？」の新規用法が見られる。否定疑問（「おいしくない？（形）」、「行かない？」（動・連用）」）は新しいものではないが、近年、動詞の原形や形容動詞語幹後続用法（「死ぬくない？／「違（う）くない？（動・原）」、「キレ（イ）くない？（形動・語幹）」）が見られる。本調査ではコーパスやツイッターの例から、敢えてズレを持たせる「近づく配慮」表現としての「新ぼかし表現」（陣内 2006）意識の存在を指摘した。

SNSなどで生の日本語に触れられる一方、新規用法は学習者の混乱になりかねない。教育現場は多様性として日本語の新しい配慮表現の生成背景を知っておく必要がある。

キーワード：「-くない？」、文末表現、新ぼかし表現、「近づく配慮／近づかない配慮」

日本語教育から民主的シティズンシップ教育へ
——社会的行為者の視点から——

From Japanese Language Education to Education for Democratic Citizenship: From the Perspective of Social Agents

名嶋 義直
琉球大学

要旨

学習者を「社会的行為者」と見なす言説は日本語教育に対し、「ことばの教育」から『主体的に社会に関わる市民』を育てるシティズンシップ教育へのパラダイムシフトを要求する。発表者はシティズンシップ教育の方向性をドイツの「政治教育」に求め、政治教育の理念「ボイテルスバッハ・コンセンサス」を主軸に据えた教材をドイツ在住日本語教育者と作成し近々出版予定である。発表ではその教材を紹介し、「対話を積み上げる」ことで日本語教育的実践がシティズンシップ教育実践となりうることを主張する。通識教育の伝統を持つ香港から、つながりを広げ多様性を豊かにするシティズンシップ教育の重要性と教員の意識改革の必要性を発信したい。

キーワード：民主的シティズンシップ教育、教材、対話、批判的リテラシー、多様性への寛容さ

近代日本における花嫁衣裳の変遷
——20世紀前後の新聞・雑誌を中心に——

**The Evolution of Bridal Attire in Modern Japan:
Focusing on Newspapers and Magazines around the 20th Century**

劉 玲芳 **Lingfang Liu**

東京大学東洋文化研究所

要旨

明治維新以降、洋風化の進展により、婚礼という人生最大の儀礼においても伝統を重んじる花嫁衣裳が、種類、色、模様、着付けなど、多岐にわたる面で大きな変化が生じた。しかし、この変化のプロセスについて詳細に研究された例は見当たらなかった。

本研究では、20世紀前後の日本の新聞雑誌の記事とビジュアル資料を中心に考察した。儀礼服としての花嫁衣裳がいかにして近代のファッション的な意味合いを持つようになったのかを明らかにしようと試みた。伝統的な角隠しを外し、日本髪を洋風の束髪に変えたり、花嫁衣裳を象徴する振袖を短くして留袖にしたりすることによって、「現代風」の花嫁イメージが形成されたことがわかった。こうした花嫁衣裳の変遷には経済的な要因が大きく影響していたと考えられる。

キーワード：花嫁衣裳、近代日本、現代風、伝統、変遷

「擬似遺族体験」としての遺骨収集
——沖縄における学生戦没者遺骨収集団の活動を事例に——

**Why Do College Students Collect Human Remains of Those Killed in Pacific War?
—A Case Study from Okinawa—**

沼野 凌子

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻博士後期課程

要旨

太平洋戦争において日本本土以外で戦没したのは約 240 万人だが、そのうち約 112 万人の遺骨が戦地に残されたままである（2023年3月時点）。遺骨を遺族のもとへ、もしくは日本へ帰還させるために今も遺骨収集事業が実施されているが、その担い手は戦没者の遺族や戦友から、戦争を経験していない若い世代へと変化している。彼らが遺骨収集に携わる過程で得る感覚がどのようなものであるのかを明らかにするため、発表者は大学生・大学院生を中心に遺骨収集を行なっている非営利団体法人に入団し、自身も遺骨収集に携わりながらフィールドワークを実施した。そこで明らかになったのは、遺骨収集の活動地における遺骨や遺留品を通してのある種の物語の「創造」であった。その「創造」を経て、彼らはまるで戦没者の遺族であるかのように遺骨を扱い、戦没者を慰霊するようになっていくのである。

キーワード：戦争記憶、遺骨収集、沖縄戦

戦後日本における中国系亡命者の文化生活
——陶晶孫の執筆活動とその亡命的時間性を事例として——

Cultural Life of Chinese Exiles in Postwar Japan
A Case Study of Tao Jingsun's Writings and Exilic Temporality

呉 穎濤

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

要旨

本報告では、中国の著名な現代文学者で医学者でもある陶晶孫（1897-1952）の日本語著作とそれに対する評論を精読することを通じて、陶の人生における戦後の日本への亡命の重要性について明らかにしていく。陶は九州帝国大学医学部を卒業した後帰国し、日中戦争期の上海で活動した。1946年、彼は台湾大学医学院教授として台湾に赴くが、後に政治的な理由によって日本へ亡命する。日本で、後に代表作『日本への遺書』（創元社、1952年）に収められる日本語エッセイ、小説を執筆し、作家としての生活を続けることを可能にした。しかしながら、本報告では、陶の亡命は単に祖国からの物理的な分離ではなく、彼の過去や文化的な生活の世界からの分離でもあったことを主張する。陶の亡命は一種の知的孤立であり、彼の属していた文学や文化的伝統とつながることを難しくしたといえる。

キーワード：戦後日本、中国系亡命者、陶晶孫、時間性

Sentence-Final Particles and Utterance Interpretation
Re-examining the Relation between Sentence-Final Particle *zo* and Imperatives

——終助詞と発話解釈—終助詞ゾと行為要求の再考察を中心に——

Matej VRBOVSKY

Osaka University Center for Japanese Language and Culture

Abstract

Although the sentence-final particle (SFP) *zo* is often described as primarily being used in monologues, there are mentions of usages that target the hearer (*Nihongo kijutsu bumpō kenkyūkai*, 2003). Among these usages, this presentation will focus on those that demand a performance of some action from the hearer, i.e. imperatives, and analyze these usages based on a relevance-theoretic approach.

This presentation will conclude the following. The SFP *zo* encodes a procedural constraint to the utterance interpretation that prompts the hearer to search for contextual assumptions that are both desirable to someone and potential to the hearer. Based on the interaction of this constraint and the proposition expressed, three distinct patterns become apparent.

First, when *zo* is used with expressions which inherently encode the imperative meaning, such as deontic modality expressions or performative verbs, their mutual semantic features resonate with each other, resulting into the effect perceived as strengthening the imperative force. Next, in the absence of deontic modality expressions or performative verbs, the constraint encoded by *zo* urges the hearer to search for desirable and potential contextual assumptions based on the proposition expressed. This leads to the result of an implicated imperative. Finally, the third pattern is seen in sentences such as “*Oi, ikuzo!*” which in previous studies is analyzed as a volitional sentence (*Ibid.*). However, this presentation will take a different approach, and present arguments supporting the claim that these sentences should be considered as separate from volitional sentences and should be established as an imperative expression instead.

Keywords: Japanese Language, Sentence Final Particles, Procedural Constraint, Contextual Assumptions, Relevance Theory

Is bragging impolite in Japanese culture?

「自慢」は日本文化で「反ポライト」か

Hiroko Itakura
Shinshu University, Japan

Abstract

This study qualitatively examines self-praise and bragging in naturally-occurring Japanese conversations between friends. It addresses the question of to what extent praising themselves or bragging is against the norm of politeness in Japanese culture and communication. Self-praise broadly refers to a speech act by which a speaker evaluates himself or herself positively for some ‘good’ (Dayter, 2014: pp. 92-93). Examples include praiseworthy matters for which speakers give credit to themselves, such as academic results, success at some task, accomplishments, possessions, and skills. (Itakura, 2022; p. 81). Bragging is a more aggressive type of positive self-presentation that involves an element of competitiveness or ‘one-upmanship’ (Decapua and Boxer, 1999).

Instances of self-praise were collected from a BTSJ corpus and its forms, sequential features and politeness functions were analysed. Self-praise in spontaneous conversation was modified by numerous strategies and frequently modified in multiple layers. Highly modified forms of self-praise suggest that this speech act poses substantial face-threat in face-to-face conversation, supporting previous research findings that modesty and indirectness are salient features of Japanese culture and politeness. However, self-praise in Japanese conversations also appeared to play positive politeness functions. Although speakers appeared to be disputing and challenging each other over the use of bragging, they in fact were enjoying playfulness and reinforcing their friendship.

Contrary to the general assumption that self-praise and bragging are immodest and should therefore be discouraged, they can be valuable linguistic resources for lubricating interpersonal relationships and consolidating closeness between friends in Japanese conversation. Gender differences are also discussed.

Keywords: bragging, self-praise, Japanese culture, politeness

占領初期の沖縄における人の分断
——小説に描かれる「混血児」——

The division of people in Okinawa in the early years of the occupation: “Mixed blood children” in Novels

藤本 秀平

高知工業高等専門学校

琉球大学大学院

要旨

アジア・太平洋戦争後、沖縄は米国の占領下に置かれた。昨年、日本「復帰」から50年を迎え、至るところで戦後沖縄をめぐる歴史や文化の検証が行われた。本発表では、「復帰」を問う際に、単なる起点としてのみ参照されがちな、施政権分離の時期（1952年前後）を、政治や文化などのあり方が大きく変容する転換点として見直す。大木進「混血児」『琉球労働』第4号（1954年）という小さな文学テキストの分析を通じて、施政権の分離という政治的・地理的分割に際して生じた人の分断と差別について、特に「混血児」の描かれ方に注目することで、その分断の歴史を批判的に再検証したい。つながりへの道は、分断を問うことから始まるはずである。

キーワード：沖縄、米国占領、サンフランシスコ講和条約、人の分断、混血児

〈食人〉系アニメーション研究
——『約束のネバーランド』における〈食人〉——

A Study of Cannibalistic Animations

白石 祝子

専修大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻修士課程

要旨

異形あるいは人間が人間を食う〈食人〉をひとつのテーマに据え、人間あるいは異形となってしまった人間の苦悩や葛藤を描いた漫画作品はここ数年に限っても複数作品で見受けられ、それらは例えば『進撃の巨人』(2009)、『東京喰種トーキョーグール』(2011)、『鬼滅の刃』(2016)、『約束のネバーランド』(2016)など、アニメーション化されている作品が挙げられる。ではなぜ近年、このような〈食人〉系作品が注目を集めているのか。本発表では、こうした疑問を出発点に『約束のネバーランド』における〈食人〉描写について検討する。

キーワード：〈食人〉、カニバリズム、漫画、アニメーション、『約束のネバーランド』

徳川時代の庶民教育における儒学思想の展開
——往来物や儒学入門書の比較検討を通して——

The spread of Confucian thought in the education of the common people during the Tokugawa period

高橋 恭寛

多摩大学

要旨

徳川時代の庶民向け道徳教育には、「仁義礼智」など代表的な儒学徳目も用いられた。ただし、平易な説明には内容の取捨選択が生じる。例えば教訓科往来物の『童子早学問』では「仁」について「身をわすれ人をはめぐみてなさをばさきたつ人を仁といふべし」とある。一方、素読独習の書『経典余師』には「仁とは本心の徳のまったきをいふ」とあり、増田立軒『入学紀綱句解』には、これに「慈愛惻隠の理なり」と続き、説明の難易度が変わる。このような往来物から儒学入門書まで、その違いについてこれまで十分に分析されてこなかった。そこで本報告では、往来物と儒学入門書とを比較して、庶民道徳化した儒学思想の内実を明らかにしてゆく。

キーワード：日本儒学、徳川思想史、庶民教育、往来物

『ビジネス日本語2』のクラスにおけるPBLの実践
——就職準備活動としてのOB・OGへのインタビュー——

**Practice of PBL in the Class of Business Japanese 2:
Interview with Student Alumni in job preparation activities**

劉 星

北京理工大学珠海学院

要旨

筆者は中国の大学で、日本語専攻三年生の授業『ビジネス日本語2』で、①内容が現実と合わない、②就職準備活動の内容も入れるべき、③主体的な学びの育成が必要との問題がある。解決するために、PBL活動「オンラインでOB・OGへのインタビュー」を導入し、今年の2月から6月の間に、ふたつのクラスで実践した。よって、本研究はPBLを通して、その実践の過程と事後アンケートの結果について報告したい。

キーワード：ビジネス日本語、就職活動、PBL、インタビュー、真正性

言語学における独り言の実際

——フィクション会話と自然会話の観点から見た日本語の独り言——

**Soliloquy in the Theory of Linguistics :
Focusing on Soliloquy in Japanese from the Viewpoint of
Fictional Conversation and Natural Conversation**

KANJAMAPORNKUL Sathida

大阪大学グローバルイニシアティブ機構

要旨

本発表では、日本語のフィクション会話と自然会話を通して、独り言が実際どのような性質や働きを持つのかについて明らかにすることを目的とする。考察した結果、独り言は「典型的独り言」と「擬似的独り言」の大きく2種類に分類できることがわかった。「擬似的独り言」とは、テレビドラマやアニメ、映画等のようなフィクション会話に出現するものであり、発話時には、周辺に誰もいないまたは相手が存在しないが、実際は視聴者が存在しているというものである。つまり、この場合の独り言は、発話者は誰かのために情報を伝達しているのであり、通常の会話と同様なものと言えよう。一方、自然会話に現れる「典型的独り言」はいわば、自然発生的なもの或いは反射的な反応に過ぎないと考えられる。

キーワード：独り言、フィクション会話、自然会話、典型的独り言、擬似的独り言

地芝居が内包するコミュニティ創成力

——土佐絵金歌舞伎を例に——

The Community Building Power of Jishibai: A Case of Tosa Ekin Kabuki

永原 順子

大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻

要旨

地芝居とは、江戸や上方で上演されていた歌舞伎が各地に広がり、地元の庶民たちが神社の祭礼などのおりに自ら演じて楽しむようになったものである。18世紀から19世紀にかけて流行し、現在も日本各地、約100カ所で上演されている。高知県香南市赤岡で毎年7月に上演される土佐絵金歌舞伎は、歌舞伎の芝居絵を元にして一度途絶えた芝居の風習を復活させたものである。本発表では、この事例を通じ、夏祭りにおける芝居絵の伝承、地域共同体の持つ求心性、芝居小屋という空間、芸能継承の素地となる習い事の系譜、経済的基盤と人的支援、などの要素から、地芝居が内包するコミュニティ創成力について論じる。

キーワード：歌舞伎、祭礼、芸能継承、地域共同体

無臭的な日本ポピュラー・カルチャーによるサイノフォニックな想像空間
——『ドラえもん』の二次創作から見る華僑コミュニティと香港——

**Deriving Sinophone Imaginary Space from Culturally Odorless Japanese Content: The Case of a Derivative
Work of *Doraemon***

李 宗泰 (クリス)

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

要旨

『児童樂園』は1953年から1994年までに、香港で出版された子供向けの雑誌であった。長い間に香港に限らず、海外の華僑華人コミュニティもその発信の対象となっていた。『児童樂園』は最も早く日本のマンガである『ドラえもん』を輸入したと言われた。1973年から1981年の間、その雑誌は無許可で『ドラえもん』を転載し始め、著作権申告を受けた後にその連載が打ち切られた。わずか3ヶ月後、模倣作であった『生活幻想ストーリー IQ たまご』(生活幻想故事 IQ 蛋)という連載が始まり、1994年終刊したまでに続いた。

本報告は『IQ たまご』を例とし、当時「無臭性」(Iwabuchi 1998、2002)という特徴を持つと言われる海外の日本文化コンテンツは、いかなる改編を受け、それによって生じたサイノフォニックな想像空間を創出することを考察する。

キーワード:ポピュラー・カルチャー、東アジアにおける超域的文化、サイノフォン、言語人類学、二次創作

中国語による影響を受けた日本語の文字表記
——中華学校に通う小学二年生の場合——

**Chinese Influence on Japanese Writing:
For a Second Grader Attending a Chinese School**

中之内 夏美
専修大学大学院

要旨

本発表は、中国語による影響を受けた日本語の文字表記についての一考察である。授業や家庭においても日本語の他に日常的に中国語（台湾國語）を使用する中華学校の小学二年生を対象とし、児童の書く日本語のひらがな、カタカナ、漢字に中国語のどのような影響が出ているのかを観察した。ひらがな、カタカナでは形の似ている注音符号（ㄅㄆㄇ）との混同などの影響がみられ、漢字には、中国語の繁体字との混同がみられた。これらの誤用を定着させずに、日本語を正しく習得させるためにも、低学年のうちに、それぞれの違いや特徴の差に着目させることが重要である。

キーワード：中国語、日本語学習、日中バイリンガル、漢字、年少者

日語中的蛇文化

日本語の中の蛇文化

李 欣

广东外语外贸大学

要旨

日本文化的发展深受中华文化的影响，而其与蛇有关的文化在其发展过程中无疑也无法脱离这种强大的影响力。中华蛇文化对日本蛇文化的影响力在相关的日语词汇、日语俗语等方面均有所体现。而在深受影响的同时，“蛇”在两国文化中的形象也同样有着相当微妙的区别。这种微妙的区别体现在两国的蛇俗语中，便是尽管都存在相当数量的含贬义的蛇俗语，但相比起中文蛇俗语的世俗化，以及对蛇类具有更加强烈的厌恶与打杀倾向，日语中的蛇俗语则相对地更富于褒义色彩与神异色彩。

关键字：蛇文化，日本文化，中华文化，俗语

ポストコロナに向けたオンライン留学の可能性と課題
——コロナ禍のオンライン留学実態の検討から——

**The Possibilities and Challenges of Virtual Study Abroad in Japan towards the Post-Corona Era:
the Experiences of International Students Studying Abroad via Online during COVID-19**

YEUNG Sui Sum Walden

京都大学大学院 教育学研究科

要旨

本稿では、コロナ禍から生まれた新たな留学形態である「オンライン留学」の今後の課題と可能性を明らかにするため、コロナ禍の3年間日本の「オンライン留学」に関する論文レビューと、「オンライン留学」を受けた留学生を対象とした半構造インタビューを通じ、日本の「オンライン留学」の実態を整理し、授業と留学生活の問題点と改善策を提示した。そこで学習管理システム(LMS)の活用、ICT特化のFD活動、SNSによる教員・学生間の交流、国際協働オンライン学習(COIL)を紹介した。それらによって、先進技術の活用でオンライン留学の既知欠点を減少又は解消し、渡航しなくてもできる「オンライン留学」の位置づけと、現地留学と異なる新しい価値を示した。

キーワード：オンライン留学、留学生支援、異文化体験、国際交流、教育工学

日本における初級日本語科目履修中断者の発音学習
——日本人とのコミュニケーションに着目して——

**Pronunciation Learning of Students Interrupting Elementary Japanese Courses in Japan:
Focusing on Communication with Japanese**

大戸 雄太郎
東京国際大学 JLI

要旨

本研究では、オンラインで必修かつ初級前半レベルの日本語総合科目を受講した後、来日して選択制かつ初級後半レベルの日本語科目を履修しなかった学習者3名を対象に、アンケートとインタビューから発音学習の内容と経験を質的に明らかにする。学習者らは、様々な理由から科目を履修しない代わりに、大学、近所、アルバイトで知り合った日本人とコミュニケーションを取りながら、日本語の発音に意識を向けていることが分かった。また、日本での生活の中で、発音が原因で言いたいことが伝わらない経験をしたことを機に、自律的に日本語を学習し続ける、あるいは、日本語科目を再度履修しようとしていることが分かった。

キーワード：音声教育、留学生教育、日本語学習者、自律学習

Vision of Japanese Language Education in universities in Vietnam within the context of diverse and interconnected world

—Promoting Global Competence and Societal Engagement—

多様でつながる世界の文脈におけるベトナムの大学における日本語教育のビジョン
——グローバルな能力と社会的な関与を促進する——

Tham Thuy Hong
Phenikaa University

Abstract

This research explores the far-reaching vision of Japanese Language Education in Vietnamese universities, extending beyond linguistic and cultural comprehension. With a focus on addressing both societal and global concerns, the study employs a mixed-methods approach to investigate how Japanese language programs actively contribute to problem-solving and heighten awareness of pressing global issues. Through qualitative interviews and a quantitative survey, the research comprehensively evaluates language policies, curriculum design, and the integration of digital technology. Emphasizing the pivotal role of Japanese Language Education, the study highlights its capacity to foster cultural competence and effective cross-cultural communication, cultivating appreciation for diverse cultures and promoting inclusivity. Additionally, the research examines the profound impact of Japanese language proficiency on addressing global challenges, as students actively participate in cross-border collaborations and gain a deeper understanding of international issues. Moreover, the study underscores the significance of language education in promoting cultural diplomacy, facilitating economic cooperation, and strengthening diplomatic ties between Vietnam and Japan. By emphasizing the relevance of educational partnerships and exchange programs, the research aligns the vision of Japanese Language Education with the dynamic demands of an interconnected world. Ultimately, this study provides illuminating insights into the transformative power of language education, shaping socially responsible and globally conscious individuals. The valuable insights garnered from this research inform the development of strategies to effectively address societal challenges and cultivate a generation capable of positively impacting the global stage.

Keywords: Japanese language education, Vietnam, diverse, interconnected world

ビジネスコミュニケーションにおける「異文化」に対する意識の構築
——日系企業に勤務する外国人ビジネスパーソンに対するインタビューから——

**Building Awareness of "Intercultural" in Business Communication
-Based on Interviews with Foreign Businessperson Working for Japanese Companies**

立川 真紀絵
大阪大学

要旨

本研究では、日系企業に勤務する外国人ビジネスパーソンに対してビジネス場面における種々の経験に関するインタビューを実施し、彼らの「異文化」に関する語りを分析する。本研究の目的は、彼らが経験したビジネスコミュニケーションにおける「異文化」に対する彼ら自身の意識が、いかにしてインタビューの中で構築されるかを解明することである。どのような文脈で、何の目的で「異文化」が語られるかを捉えることにより、現在の日系企業においてビジネスパーソンが抱えるコンフリクトの実情、および日系企業における「異文化」の扱われ方について論じる。

キーワード：ビジネスコミュニケーション、異文化間コミュニケーション、意識の構築、インタビュー、日系企業

Motivations for Japanese Language Learning in North East India

北東インドにおける日本語学習の動機

Nozomi Tokuma

Girijananda Chowdhury University, Assam, India

Abstract

Recently, India-Japan is deepening economic and political ties as part of the Act-East Policy and Special Strategic and Global Partnership. Hence, the number of Japanese language learners in India's urban areas is steadily increasing. According to the survey report on Japanese-Language education abroad by Japan Foundation, the primary reasons for studying Japanese in the South Asian region are better work prospects in the home country (86.2%), future work prospects in Japan (75.5%), and interest in Japanese history, literature, art (55.8%).

However, these surveys are conducted in urban or metropolitan areas and not much is known about the interest or motivation in learning foreign languages in the non-metropolitan regions of South Asia. India's North Eastern region is one such area where such surveys are not conducted. Recently, Tokuma & Jha (2023) surveyed 395 university students to know about their preferred foreign languages to learn. The study revealed that Japanese, French, and Korean are the most preferred languages given an opportunity to learn them. Even though the primary motivation for learning foreign languages depended on the languages, the respondents from North East India reported interest in culture and traveling to be the primary motivation for their choice of foreign languages. The responses also showed state and gender specific patterns in choosing a foreign language. Hence, the current study reports the findings of semi-structured interviews conducted on residents of three North East Indian states, namely, Assam, Nagaland and Manipur, to explore the reasons behind such patterns in choosing a foreign language.

Keywords: North East India, Japanese Language Learning, Motivation

音声表現力と音声観察力の向上を目指す多様なアクティブラーニング
——新しいメディア stand.fm を活用した教室活動——

**Diverse Active Learning to Improve Voice Expression and Voice Observation Skills :
Classroom Activities Utilizing The New Media ‘stand.fm’**

王 伸子
専修大学

要旨

大学の学部ゼミ活動で、「音声」を重視したアクティブラーニングを導入している。目的は、専門領域としての音声学の研究テーマを探ることと、日本語の音声運用力の向上を目指すことの二つである。実際には、個人、あるいはグループがテーマを設定し、原稿を作成して録音し、発信している。内容を考え、音声表現を練習し、録音して発信するという一連の活動と、成果物を作成して音声配信プラットフォームを利用して発信することで、セルフアセスメントも可能であり、ポートフォリオに蓄積できる成果物も作成でき、一般学生も外国人留学生も等しく効果を上げている。これまで実施してきた3年間の教室内外の活動とその効果について報告する。

キーワード：アクティブラーニング、表現力向上、音声配信、stand.fm、ポートフォリオ

香港再発見

——コロナ後の日本からの留学生が見つけた香港——

A new encounter with Hong Kong

小出 雅生

香港中文大學 日本研究学科

要旨

この4年間、香港は大きな挑戦を経験した。抗議活動に続き、新型コロナのパンデミックで、2020-21年はついに1名の交換留学生も香港に来ることができなかった。2023年には、以前の半分ほどだったが交換留学も再開された。

社会的に大きな動揺があった後、あえて香港を留学先として選んでくれた学生たちがどのように香港を見、どのような可能性を見いだしたのか、調査やインタビューを行い、その結果を踏まえ、留学先として我々が気づかずにいた社会的資産を掘り出し、香港のこれからの特性を考察したい。

また、これから日本留学を目指す香港の学生にも、日本からの学生との出会い・交流につながるアイデアを再考したい。

キーワード:交換留学、語学留学、異文化体験、多様な出会い、危機管理

**Beliefs about Speech Education and Teaching Practices of Japanese Language Teachers
in Universities across China: Results of a Model-based Questionnaire Survey**

中国の大学の日本語教師における音声教育観と指導実態
——モデルに基づいたアンケート調査の結果から——

Luolin Liu
Waseda University

Abstract

In this study, we designed a questionnaire based on a model of belief-experience-opinion, and investigated Chinese teachers of Japanese language (CTs) working in universities across China about their beliefs about speech education and their teaching practices. 52 teachers from 27 universities answered the questionnaire. They were divided into two groups: G1 had practiced systematic pronunciation instruction for at least one semester, and G2 had practiced non-systematic pronunciation instruction for less than one semester. By analyzing their answers, we revealed the following five points. First, despite some differences, all CTs believe that speech education is necessary and have practiced pronunciation instruction to some extent, mainly during the freshman year and especially at the beginner level. Second, while most instruction of G2 was given in Comprehensive Japanese classes, G1's was given in various classes like Pronunciation, Conversation, Listening, etc. Third, G1 instructed on almost every aspect of pronunciation, while G2 focused more on Japanese accent and rhythm. It should be noticed that although both G1 and G2 instructed little on pause or focus, G2 tends to consider pause and focus more necessary in speech education. Fourth, both G1 and G2 used feedback, explicit knowledge/rules, and sound demonstrations as methods of instruction, but visual (such as marks or symbols) and movement (such as moving body parts) aids were used less. Fifth, around 40% of CTs shared their own ways of using learner's L1 or L1 dialect in instruction, which is categorizable by using the TP-SD framework from literature.

Keywords: Speech education; Pronunciation instruction; Teacher's beliefs; Teaching practices; Use of learner's L1

**Text-Generative AI in Language Learning:
Assessing its Impact and Advantages over Corpus-based Approaches**

言語学習におけるテキスト生成 AI :
その影響とコーパスベース手法との比較

Masayuki Hirata

The Hong Kong University of Science and Technology, Center for Language Education

Abstract

Generative AI has emerged as a significant topic of discussion in the field of education, with its potential and possible negative impact under scrutiny. Language education, like other domains, is inevitably embracing technology to explore its potential. This research examines the use of text-generative AI, such as Chat GPT, compared to traditional corpus-based approaches, from the perspective of language learners. The study focuses on the potential benefits of text-generative AI for supporting individual language learning. While corpora serve as valuable sources of information for language learners, utilising them effectively requires particular training. This research investigates whether the question-and-answer chat format of generative AI can replace traditional corpus usage in various aspects of Japanese language learning, such as reading frequency information, extracting natural collocations, understanding word usage and senses, identifying appropriate registers, exploring common errors and grammatical constructions, and gaining insight into synonyms and antonyms, through concrete examples. The findings highlight both the drawbacks and advantages of using text-generative AI for individual language learning. Although there are limitations to its use, such as potential pitfalls for learners, there are cases where generative AI outperforms corpus-based approaches in terms of flexibility and accessibility. By shedding light on the strengths and weaknesses of text-generative AI in language learning, this research contributes to the ongoing discourse on integrating technology in education and provides insights for educators and learners seeking practical language-learning tools.

Keywords: Text-generative AI, Corpus-based approaches, Chat GPT, Individual language learning

専門日本語教育から見た CA の日本語使用場面における語彙的特徴分析
——台湾及び中国の教科書を中心に——

**An Analysis of the Lexical Characteristics of Japanese Usage Situations of CAs from the
Perspective of Professional Japanese Language Education
—A Study of Taiwan and China Textbooks—**

羅 永祥

武庫川女子大学大学院

要旨

本研究は専門日本語教育の視点から「CA（キャビン・アテンダント）の日本語使用場面における語彙の特徴」を明らかにするものである。まず、台湾及び中国で出版されている CA のための日本語教科書から「搭乗」、「機内食」、「免税品」場面の語彙を取り上げ、形態素解析ツール「Web 茶まめ」を用いて「品詞」、「語種」分析を行い、さらに語彙分類ツール「CradleExpress」によって場面ごとに語彙を分類し分析する。結果では、『乗務日本語』（中国）と『航空日本語』（台湾）ともに接頭辞「お」、接尾辞「様」、名詞「用意」、「了承」等の待遇表現に関する語彙の特徴性が見えてきた。語種の配置および使用頻度では、両教科書とも「漢語」、「和語」、「外来語」の順位になり、「両替」などの「混種語」は極めて少ない割合に留まる。しかし、場面から見れば、語種の順位が置き換わる現象も見られる。

CA のための日本語教科書では、一般的な日本語教科書の場面や語彙の設定とは異なり、乗客との様々な待遇表現の学習が重要な位置を占めることは明白である。しかし、学習者にも授業設計をする教師にとっても「どんな」場面で、「誰と」対話するか、その際「どのような」表現を選択し使用するか等、待遇表現の習得および運用能力の獲得は容易とは言えない。今後、「CA のための日本語研究」を専門日本語教育の一分野として認識したうえで、教材や教授法の改善を提案したい。

キーワード：専門日本語、キャビンアテンダント、日本語教科書、語彙分類表、形態素解析

ネイティブスピーカー（NS）志向の日本語学習者の第二言語話者としてのアイデンティティ構築
——主体性のあるアイデンティティに基づく「居場所」の提供——

**Identity-building as a Second Language Speaker of a Japanese Learner with Native-speaker Belief
-Providing a “Place to Belong” Based on Subjective Identity-**

盧 叢珊

早稲田大学日本語教育研究科

要旨

本研究は一人のNS志向の日本語学習者のライフストーリーを分析することを通して、彼の第二言語話者としてのアイデンティティがどのように構築されたかを明らかにした。学習者のアイデンティティに「アイデンティティ」、「役割」、「声」という3の側面が存在する。学習者は異なる文脈に応じてふさわしい側面を選び他人に露呈する形でアイデンティティへの自己投資を行っている。学習者の主体性のあるアイデンティティを見出すには、実践参加の中に「自由に日本語を話せる」生理・心理的安全性、自身が持つ文化的資本の価値への他人と自己からの承認、個人は自分が場の一員と認識する「帰属感」を感じられる「居場所」を提供することが必要である。

キーワード：学習志向、ネイティブスピーカー／ノンネイティブスピーカー、正しい日本語、アイデンティティ、居場所

アカデミックライティングにつながる読解授業の方法の検討
——実践から見える意見文作成上の課題——

Difficulties in Academic Writing for Japanese N2-level Learners

赤城 永里子

大阪経済法科大学

要旨

報告者が在籍する大学では、アカデミックライティングにつながる読解授業の方法の構築を目的に、N2レベルの学習者を対象に文献の引用を含む意見文作成を行った。本報告では、その実践から、学生が意見文の作成で困難を抱えている点について報告し、その解決を図るための読解授業での方法について検討する。収集された全30件の作文データをルーブリック評価を行い、また、科目担当教員に授業内での様子についてインタビューを行った。その結果、1つの段落の談話構成や文章全体の談話構成、引用という行為に困難を抱えていることがうかがえ、それらの能力の向上につながる読解教育の方法について、検討する。

キーワード：読解教育、アカデミックライティング、意見文、談話構成、引用

The learner's arbitrary interpretation of the score of JLPT

JLPT のテスト結果に対する日本語学習者の「恣意的」解釈

Jianyu Wang

Graduate school of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Japan

Abstract

Japanese Language Proficiency Test (JLPT hereafter) is considered as the most representative and socially influential Japanese language ability test. On the other hand, the scores of the JLPT influence test takers and learners' self-perceptions, which might deviate from the test's original purpose of providing a reference for language ability. However, this influence has not been thoroughly researched in the existing Japanese language education literature. In this study, the author conducted in-depth interviews with four learners who had varying experiences with the JLPT to clarify how the scores of JLPT were interpreted by those learners, which in turn influenced learners' estimation of their Japanese language ability. The results revealed that the learners' limited understanding of their scores associated with arbitrary interpretation, whereby arbitrary estimations of their Japanese language ability occurred. Specifically, the learners had tended to estimate their Japanese language ability based merely on the intuitive JLPT scores. Furthermore, such arbitrary estimation from JLPT scores shaped or was being shaped by learners' estimation obtained from other potential approaches, such as daily life communication. For instance, if the estimations from JLPT seemed unmatched with the others, the learners tended to believe the biased estimation obtained from one of the approaches and question the validity of the others, rather than estimating their Japanese language ability from a comprehensive perspective. These findings are expected to highlight the importance of understanding the influence of Japanese language ability tests to the learners' self-perceptions and inspire the Japanese language education research from learner-centered perspective.

Keywords: JLPT, learner interpretation, Self-estimation, Japanese language ability, in-depth interview

神沢杜口における「老い」と〈迷惑〉意識

Kanzawa Tokō 's notion of aging and being a burden to others

本村 昌文

岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域

要旨

現代日本において、老い・看取り・死について考える際に、「家族や子どもに迷惑をかけたくない」という意識を抱く人が多い（以下、この意識を〈迷惑〉意識と表記）。このような多くの人々が抱く意識であるにもかかわらず、〈迷惑〉意識に関わる本格的な研究、特に老い・看取り・死に関わる〈迷惑〉意識の歴史的な研究はほとんどなされていない。

以上をふまえ、本発表では、近世日本における〈迷惑〉意識に関する研究の一環として、神沢杜口（1710年～1795年）を取り上げて検討する。具体的には、杜口の老いと〈迷惑〉意識について考察し、〈迷惑〉意識が様々なほかの意識と関わりながら重層的・複合的な構造を有していることを明らかにする。

キーワード：〈迷惑〉意識、老い、看取り、死

ネパール語を五十音図に利用する
——日本語学習をより容易に——

Using Nepalese for the syllabary map: Easier to learn Japanese

引田 梨菜
専修大学

要旨

日本語学習は多くの場合、かなの学習から始まる。かなは日本語独自のものであるため、ほとんどの学習者が日本語を学習しようと思って初めて触れるものである。

しかし、この五十音図の音韻はネパール人日本語学習者にとって、非常に学習しやすいものであることが聞き取り調査からわかった。ネパール語からの正の干渉があるネパール人にとって、学習を始める際の心的ハードルを下げられる大きなポイントとなり得る。

なぜ学習しやすいか、正の干渉が起こるかということは、ネパール語の正書法であるデバナガリの音韻システムにあるとして、日本語教師がそれを意識した文字と発音導入を行えるよう、具体的な方策を提案する。

キーワード：かな学習、五十音図、ネパール人日本語学習者、ネパール語、デバナガリ文字

初級日本語教育における媒介語使用の有効性
——ビジネスパーソンを対象とした教育現場から——

Effectiveness of using an intermediary language in elementary Japanese language education
-Education for business students-

亀崎 晶子

GSSC（日本大学大学院総合社会情報研究科）日本語クラブ

要旨

本研究はビジネスパーソンの学習者を対象とした初級日本語教育において、媒介語の使用が有効な教授方略であるか否か探ることを目的とする。初級レベル4名の学習者を対象にアンケート調査、直接法の授業実践、インタビューを行い、インタビューの発話データを KHCoder で分析し、その結果を考察した。分析の結果、基本的な語彙や文法を習得する際、初級前半レベルの学習者は媒介語の使用が必要であるという考えが示された。一方、初級後半レベルの学習者は直接法の授業が適切であると考えていることが明らかになった。さらに、外国語の習得経験が媒介語の使用に対する考え方に影響を与えることが示唆された。

キーワード: ビジネスパーソン、媒介語、初級日本語教育、学習者ビリーフ

日本語教育における教案の授業導入部分について
——多様な学習者に理解される授業の導入——

About the introduction part of the lesson plan in Japanese language education
—Introduction of lessons understood by diverse learners—

小池 真由
専修大学大学院

要旨

日本語教育における教案作成の指導では、その授業の指導項目に入る前に授業全体の導入の時間を設けることが推奨されていることがあるが、その時間の実態は明らかになっていない。

本研究では、日本語教育の教案における授業導入の現在の扱い方を調査し、分類を行った。

日本語教育の教案に授業導入の時間は概ね設けられていることがわかった。しかし、教案によっては文法導入などの指導項目の中に組み込まれている場合があり、その時間の扱いは教師により異なるため、教師が意図した通りに授業導入が学習者に伝わるとは限らない。なぜ、そのような差異があるのかを解明する。授業導入の明確化は、学習者の動機づけに効果があると思われる。

キーワード：日本語教育、教案、導入、授業計画

ビデオチャットアプリが実現可能にした
実践的疑似体験学習と参加体験型学習
——ZOOM がつないだ教育現場と実社会との接点——

高橋 美智子

香港大学專業進修学院

要旨

新型コロナウイルスの影響により実施された遠隔授業は、当初さまざまな問題点が指摘された。しかしその一方で、ZOOM 等のビデオチャットアプリの活用により、教育現場と実社会を繋ぐプラットフォームが確立され、「学びをその場で生かす」実践的教室活動が実現可能となり、延いては産学連携の促進と学習者の要望に合わせた参加体験型学習の実現へと発展させることができた。

本発表では、上記授業活動の報告を行うとともに、AI 教育が加速する昨今、私たち人間教師だから担える「人と教育を繋ぐ役割」についても考察する。

キーワード：遠隔、疑似体験学習、社会人教育

ベトナム人元技能実習生日本語教師の日本での経験が教育実践にどのような影響を与えるか
——日本人コミュニティとの関わりからの一考察——

How Do Ex-TITP Vietnamese Japanese Language Teachers' Experiences in Japan Impact Their Teaching Practice?

時野 加奈子

名古屋大学大学院人文学研究科

要旨

ベトナム人技能実習生の中には、帰国後に日本語教師になる者が報告されている。しかし、彼らの日本での経験が、教育実践にどのような影響を与えているのかは明確に解明されていない。そこで、本研究ではハノイ市で働く元技能実習生日本語教師に半構造化インタビューを実施し、彼らの教育活動をエンゲストロームの活動システムを援用して分析した。その結果、教育実践において日本での日本人コミュニティとの関わりが影響を与えていることが示唆された。具体的には、日本人同僚との関係から、日本社会に即したセンター内のルールを通じて生徒に厳しさに耐えることを教えたり、教師同士の協働において他者を尊重したりすることが挙げられる。

キーワード：ベトナム、技能実習生、帰国、日本語教師、活動システム

地域協力に関する国際機関の役割

——パブリックディプロマシー組織としての日中韓三国協力事務局——

Role of International Organisations on Regional Cooperation

高橋 佑稀乃

神戸大学 国際協力研究科

要旨

2011年9月、日中韓協力を促進する調整機関として三国協力事務局（以下 TCS）がソウルに設立された。しかし先行研究の評価は芳しくなく、二国間関係の悪化による活動制限が指摘されている。では、TCS は日中韓協力においてどんな役割を果たしているのだろうか。元職員らによると、TCS は高度に政治的な分野を避けながら独自事業を開発している。また、実質的に三国政府とのパイプ役を担っていた事務局長・事務次官経験者への聞き取り調査によると、三国政府に依存している意思決定プロトコルや資金調達過程も独自性の追求に寄与したと考えられる。結論として、TCS は日中韓協力促進に向けた非政治分野のパブリックディプロマシーを担う組織になりつつある。

キーワード：日中韓協力、国際機関、国際政治、パブリックディプロマシー、組織論

日本語音韻習得のための自律学習支援
——e-learning を活用した有声・無声破裂音の聴取練習から——

**Supporting Autonomous Learning for Japanese Phonological Acquisition
: Perceptual Practice of Voiced and Voiceless Plosives Using E-learning**

大久保 雅子

早稲田大学日本語教育研究センター

要旨

本研究の目的は、e-learning 教材を使用した聴取練習を通して、学習者がどのような気づきを得たのかを明らかにし、自律学習支援の在り方を検討することである。中国の大学で日本語を学ぶ学生 10 名が e-learning 教材を使用して聴取練習および練習毎の振り返りを行った。振り返りの記述内容の分析から、学習者が聴取練習を通して自己モニターを働かせ、聴取困難な音韻や日本語母語話者の発音等に関する様々な気づきを得ていることが明らかになった。本調査結果から、教育現場において、教師による学習者への様々なモデル音声の提供、自律学習における気づきの確認、聴取練習の継続に対する支援が重要であることが示唆された。

キーワード：振り返り、自己モニター、気づき、モデル音声

日本語学習に対するメタ認知を高めるための内容重視型授業
——「日本語学習のための心理学」の実践と評価——

CLIL to Increase Metacognition for Japanese Language Learning
-Practice and Evaluation of “Psychology for Japanese Language Learning”-

小林 由子
北海道大学

要旨

本発表の目的は、上級レベルの日本語学習者が日本語学習に対するメタ認知を高めることを目的とした内容重視型授業（CLIL）「日本語学習のための心理学」の実践の概要を紹介し、学習者のプロダクトから評価を行うことである。授業はすべて日本語で行われ、学習者は話す・聞く・読む・書くの四技能を駆使して学習に関する心理学を学び、自らの日本語学習への振り返りを行う。上級の日本語クラスをすべて終えた学習者には動機づけの低下が見られるが、学習不安・動機づけ・技能獲得などの心理学的なトピックについてグループワークを交えて学ぶことによって、学習課題を発見し自己調整的な学習姿勢を持つことができた。

キーワード：メタ認知、心理学、内容重視型授業、自己調整学習

ボルネオ『俘虜収容所月報』にみる原住民観と帝国陸軍の対外言語普及戦略

**Japanese Imperial Army's Image of Natives and the Strategy of Language Diffusion: An Investigation into
*Monthly Report of POW in British North Borneo***

二村 洋輔

至学館大学

要旨

大日本帝国の言語普及に関する研究は、植民地における日本語教育や、同化政策、皇民化政策に関連づけられて行われてきた。つまり、その普及対象としては、植民地におけるアジア人が明文化されないまでも想定されていた。先行研究の中では殆ど扱われていないが、帝国陸軍が運営していた旧英領北ボルネオ俘虜収容所が発行していた『俘虜収容所月報』は、帝国の言語普及戦略の興味深い一面を示している。本発表では、先行研究における論点を整理しつつ、『俘虜収容所月報』第一号に掲載された初代所長の菅辰次の訓示を検討し、帝国陸軍の言語普及観・文化戦略を、帝国陸軍の原住民観と関連づけながら読み解いていく。

キーワード：ボルネオ俘虜収容所、対外言語普及、原住民、イデオロギー

望月カズ人物史の再編成

——課題と展望——

**Reexamining the Personal History of Kazu Mochizuki:
Challenges and Prospects**

樋口 謙一郎

相山女学園大学

要旨

望月（永松）カズ（1927-1983年、以下「カズ」）は「満州で孤児となり、朝鮮戦争後の韓国で130人以上の孤児を育てた日本人女性」として知られる。カズをめぐるのは、本人の手記、新聞記事や手紙をまとめた写真集、関係者による追想録が残っており、それらをもとに、評伝、小説、ミュージカル、映像コンテンツなどが制作されている。

それらは、それぞれカズの人物史を物語る試みといえるが、しばしばカズの「偉人」性が強調されるあまり、フィクションが混入されたり、重要な事実が無視されたりすることも多く、いわば「美談の一人歩き」となってしまうこともある。

以上の問題意識から、本発表では、カズや関係者による記述および周辺情報を整理し、可能な限り客観的な人物史を再編成する試みを紹介し、その課題と展望を検討する。

キーワード：望月カズ、人物史、手記研究

日本語とベトナム語における「青」という色彩語の感情概念メタファー
——認知言語学の観点から——

**The emotional conceptual metaphor of cyan color in Japanese and Vietnamese
A Cognitive Linguistics Approach**

グエン・ティ・ニュ・イー¹
ベトナム ダナン外国語大学
ディン・ティ・ヴェット・ヒエン²
ベトナム ダナン外国語大学

要旨

本研究では、日本語とベトナム語の「青」という色彩語について、認知言語学の身体論に基づき、具体的なものの「青」という起点領域から、抽象的なものの「感情」という目標領域への写像である感情概念メタファーのモデルを分析した。日本語の「青」は「怒り」「恐怖」「悲しみ」「羨望」の消極的な感情概念に写像していることが明らかになった。ベトナム語にも、「恐怖」「悲しみ」の表現があるが、「希望」という感情も表しているのであって、「怒り」「羨望」と解釈されることはなく、両言語で必ずしも一致するわけではない。本研究で得られた結果を総合的に考察し、学習者にとってより良い色彩語の多義語指導のための有益な視点を提供する。

キーワード：青、感情メタファー、身体論、認知言語学、色彩語

香港の社会情勢が与える日本語学習への影響
——学習動機調査から——

The influence of Hong Kong's social situation upon Japanese language learning
—Survey on the learning motivation—

村上 仁¹

UOW カレッジ香港

高田 和幸²

UOW カレッジ香港

要旨

香港における日本語学習の動機については、これまでも様々な形で調査・報告されてきた。その多くで漫画やアニメといった日本のポップカルチャーがきっかけで日本語学習を始める学習者が多いことが報告され、筆者の勤務する大学でも学生のそういった声をよく聞く。

一方で香港では、近年の社会情勢などの影響もあり、海外への移住者が増加し、人口流出が社会問題の一つともなっている。そこで今回は日本語学習者への学習動機のアンケート調査をするとともに、将来的に日本への就職や移住を考えている・考えていないという回答者をそれぞれ抽出して半構造化インタビューを実施し、その実情を探るとともに、香港の日本語教育の今後の可能性についても考えたい。

キーワード：日本語学習動機、香港の社会情勢、移住、アンケート調査、インタビュー調査

中小學日語課程
——目標達成及挑戰——

小中学生日本語課程開設について

林 静賢¹

香港日本文化協會日本語講座

高橋 李玉香²

香港日本文化協會日本語講座

要旨

日本語講座於1968年始創於日本領事館文化部，2000年起由香港日本文化協會繼續營辦，為香港各界人士提供優質的日語教育。本校中小學日語課程創立之主要目的是為提高香港中小學生學習日語的興趣及開拓低學年學生對日語的認識。

校方特別注重課程設計及教材運用。在教學過程中，老師亦遇到不少困難及挫折；如小學課程導師須一邊教學一邊維持課堂秩序，中學生亦常見專注使用電子產品而無心學習，故導師須努力以不同方式提高同學的學習意欲及提升學習效能。本校期盼低學年學習者能透過學習日語，對日本文化及社會有較深切的認識。

關鍵字: 1, 低學年學習者 2, 專注力不足 3, 課堂秩序 4, 教學挑戰 5, 學習成果

日本の大学における合理的配慮決定までのプロセスの実際
——韓国との対照から見えること——

**The actual process used at Japanese universities for determining reasonable accommodations:
insights from comparison with Korea**

鄭 惠先¹

北海道大学

平田 未季²

北海道大学

要旨

韓国では2007年から、日本では2016年（民間事業者は2021年）から、障害を持つ者に対する合理的配慮（以下、配慮）提供が義務となった。本発表では、日本の大学において共有されている配慮の手続きを韓国の正当な便宜と対照しながら示すとともに、日本の大学における調査に基づきその運用の実際と課題について述べる。日本と韓国では政策において障害の捉え方が異なり、それが大学における配慮／便宜内容決定の手続きに影響している。さらに、同一の手続きを共有する日本内でも、大学が持つ現場のリソースの異なりが、配慮内容に影響を与えていることが窺えた。

キーワード：合理的配慮、正当な便宜、障害学生支援、建設的対話、個人別教育支援計画

短期留学生は課題解決型学習(PBL)を通してどのような力を伸ばすのか
——母国および留学先の地域の課題解決に向けて——

**What skills do short-term international students develop through PBL? :
Exploring solutions to issues and challenges in their home and host communities**

小森 万里¹

大阪大学

藤平 愛美²

大阪大学

要旨

複雑化する社会に対応できる人材育成のため、大阪大学短期交換留学プログラムの必修科目では、課題を発見し他者と協働しながら解決方法を見つけ発信する力を育成することを目指し、留学生の母国および留学先の地域についての課題解決型学習（PBL）を行っている。2022年度秋冬学期は、各自が出身国・地域についてのPBLの成果をクラスで発表し、2023年度春夏学期は、留学先である箕面市の課題解決方法をグループで考え箕面市の人々に向けて成果を発信する活動をした。実施後の振り返り、学期終了時のルーブリック、成果物の分析から、2回の実践を通して学生たちにどのような学びがあり、どのような力を伸ばすことができたのかを検討する。

キーワード：短期留学生、課題解決型学習、協働力、発信力、客観的分析能力

捨てられる民具

——高度経済成長期における四国及びその周辺を中心に——

Disposed Folk Materials: Cases from Shikoku Region

宮原 暁 (代表)¹

大阪大学大学院人文学研究科

岡野 翔太²

大阪大学大学院人文学研究科

高木 泰伸³

大阪大学大学院人文学研究科

要旨

今日、日本各地の歴史民俗資料館には、数多くの民具が集積され、収蔵庫はどこも飽和状態となっている。そうした民具 (folk materials) は、人びとの過去の経験や認識を知る上で欠かせない資料であり、いまやその使用法や製造法に関する人びとの記憶が失われつつあることを私たちは残念に思うが、その一方で、これらの民具は、人びとがずっと以前に使わなくなった民具でもある。

本報告では、高度経済成長期以降の四国、及びその周辺地域において、人びとがどのように道具や民具を使用しなくなり、使用法や製造法を忘却していったのかを、本研究チームが「モノ情報イメージング」と名づけた研究手法を用いて跡づけていく。

キーワード: 民具の廃棄、高度経済成長、四国、モノ情報

日本語学習者を対象とした書道活動のあり方
——COVID-19 渦前・渦中・渦後の学生アンケートと教員観察を通して——

**Calligraphy Activities for Japanese Language Learners
- through student questionnaires and teacher observation
before, during, and after the covid-19 vortex -**

林 朝子¹

三重大学

シューショートケオ・サランヤー²

チュラーロンコーン大学

要旨

2019年に発生した covid-19 の影響で日本語教育の在り方が大きく変化した。従来、対面実施が当然とされていた実技を伴う書道を非対面で実施し、covid-19 渦中でも活動を継続した。今回は covid-19 渦前中後にタイの大学の日本語学習者を対象に行った対面・非対面による書道活動（毛筆、筆ペン）を取り上げ、参加学生のアンケートと指導教員の観察データを基に、対面・非対面の実施による学生の書道に取り組む姿勢の変化、指導や支援の変化等を明らかにし、日本語学習者への文字学習、文字文化の継承を担う書道活動の今後のあり方を提案する。

キーワード: 対面・非対面、書道、毛筆、筆ペン、タイ人日本語学習者

「令和時代の「死」の意味論」

Semantics and Pragmatics of “Death” in Modern Japanese Animation

平寫 寛大¹

神戸市外国語大学大学院生

宮木 杏²

東洋学園大学学部生

鈴木 ケネス³

東洋学園大学学部生

蟹沢 歩⁴

東洋学園大学学部生

深井 友梨花⁵

東洋学園大学学部生

佐々木 大登⁶

東洋学園大学学部生

東海 晃久⁷

神戸市外国語大学非常勤講師

齋藤 暢是⁸

自治医科大学 助教

依田 悠介⁹

東洋学園大学 教授

要旨

本研究は、2020年代ごろの地上波アニメでの主人公以外の主要キャラの「死」の物語上の意味を解明することを目的とする。これまで古典的文学の世界では、「死」の物語上の役割は数多く議論されてきた。また、現代ポップカルチャーでは、ドラゴンクエストV（ゲーム）では主人公への動機付けとして、「魔法少女まどか☆まぎか」（アニメ）では視聴者の期待を裏切りやカタルシスの導入を目的とし描かれてきた。本発表では、言語学的な意味論を導く共同体装置（三木 2022）を援用し、主要キャラの「死」は単なる動機付けやカタルシスでは収まらず、「死」の描写による視聴者への緊張感や不安の保持という目的が存在すると主張する。

キーワード：現代アニメ、意味論・語用論、サブカルチャー、ナラティブ、死生観

日本語教師によるオートバイオグラフィーの実践と考察
——日本語教師の「ことば」をめぐる経験の語りから——

Practice and consideration of autobiography by Japanese teacher

和泉元 千春¹

奈良教育大学 教育連携講座

野畑 理佳²

武庫川女子大学 文学部

小林 浩明³

北九州市立大学 国際教育交流センター

要旨

日本社会の多文化化の流れを受けて日本語教育への社会的関心や期待が高まる中、「日本語」教師研究の自律的な発展の必要性が改めて主張され始めている。そこで本研究では、「ことば」を教育対象として扱うという日本語教師の特性に着目し、日本語教師としての内的キャリア形成に「ことば」をめぐる経験が影響を与えるのではないかと考えた。本発表では、同時代に日本語教師を目指し現在大学の専任教員として日本語教育に携わるAを含む3名がAの「言語ポートレート」「言語ヒストリー (LH)」を元に相互インタビューの形式で行ったオートバイオグラフィーとしての語りを観察し、Aの内的キャリア形成がどのように捉えられたかを報告する。

キーワード：日本語教師、オートバイオグラフィー、言語ポートレート、言語ヒストリー (LH)、複言語主義

「雅語」と注記される動詞の意味特徴

——辞書の記述を参照して——

Semantic Characteristics of Verbs Annotated as “雅語” in Japanese: Referring to Dictionary Description

木下 りか¹

武庫川女子大学

野田 大志²

愛知学院大学

要旨

日本語の辞書には一般に、「俗語」「古語」など「語の文体」（宮島 1972 等）と呼ばれる注記がなされている。その中に「雅語」もある。例えば「(信濃路を) 歩む」などである。「語の文体」の内実は整理されていないのが現状で、学習者が辞書を引いてもその理解は困難である。

本発表は、「語の文体」の中でも特徴が捉えにくい「雅語」に注目し、動詞に焦点を当ててその意味特徴を探る。結果、辞書で「雅語」と付される語義は、1) 特定の様態を描き出すなど修辭性が高い、2) 同じ語の複数の語義の中に「雅語」とは別に一般的に使用されるものがあるため、語形それ自体に古さはない、という傾向をもつことが示される。

キーワード：辞書、語の文体、雅語、用法上の制約

Developing Japanese Language Learning Content for the Japan Virtual Campus Platform

JV キャンパス用日本語学習コンテンツの開発

Vanbaelen Ruth¹

University of Tsukuba

Ono Masaki²

University of Tsukuba

Sekizaki Hironori³

University of Tsukuba

Bushnell Cade⁴

University of Tsukuba

Moon Changyun⁵

University of Tsukuba

Anubhuti Chauhan⁶

University of Tsukuba

Hatano Hiroaki⁷

University of Tsukuba

Abstract

Japan Virtual Campus (JV-Campus) is a MEXT-supported platform managed by the University of Tsukuba where Japanese universities, companies and local governments provide a wide range of online learning content, currently free of charge. The presenters will discuss how the Japanese Language Education Division at the Center for Education of Global Communication at the University of Tsukuba is developing Japanese language learning content for the JV-Campus platform. Based on student voices and in-class experience regarding available teaching and learning materials, several topics had emerged where a hiatus was felt in terms of adequate learner support and autonomous learning. We will explain the selection process of the different types of learning content currently being created, namely Academic Japanese (on-campus situations, extensive reading), Daily Life Japanese (short CFER A1-A2 conversations), Job-hunting Support (self-analysis, entry sheet writing, interview practice) and Assessment of Speech Performances (prosodic aspects, oral summarization skills), as well as how each of these pillars of the project have been narrowed down to fit the time frame and the available budget. We will then continue with a content description and the goals of the different materials. Finally, as this is a work-in-progress, we will give a preview of the contents which will be released in March 2024, and indicate areas we will work on in the future to provide learners of Japanese with practical and multi-level multi-purpose learning content. Hereby we also acknowledge Ito Hideaki and Iwasaki Takuya of the University of Tsukuba for their valuable input in this project.

Keywords: Japan Virtual Campus, Academic Japanese, Daily Life Japanese, Job-hunting Support, Assessment of Speech Performances

「初等日本語教育のための教科書作成プロジェクト
子供の視点から学べる教科書への取り組み」

梁 安玉¹

香港日本語教育研究会

亀島 裕美²

香港日本語教育研究会

伊達 久美子³

立命館アジア太平洋大学

要旨

本プロジェクトは、香港の小学校で使える日本語教科書が欲しいという現場の教師からの切実な声に応えるため、2022年8月に香港日本語教育研究会の支援のもと、小中学校や語学学校で日本語を教えている現職8名の有志教員によって立ち上げられた。日本語を外国語として初めて学ぶ香港の子供達（小学校中高学年）を対象とした教科書で、1回30分という限られた授業で習得できることは何かを念頭に、言語学習だけでなく日本の小学生の学校生活との比較や生活習慣・文化紹介を通して、子供の視点から異文化への興味を広げつつ日本語を学べるような構成を目指している。発表ではユニットの内容を実例に挙げ、本プロジェクトの取り組みを紹介する。

キーワード：初等日本語教育、教科書、子供の視点、異文化理解、体験学習

スマホ「辞書」による語彙検索行動の実態と問題点
——マカオの初級日本語学習者を事例に——

An Analysis of the Real-World Use and Complexities of Vocabulary Searches via Smartphone 'Dictionaries': A Case Study of Elementary Japanese Language Learners in Macao

李 羽喆¹

マカオ大学日本研究センター

石黒 圭²

国語国立研究所

要旨

現代の学習者におけるスマホによる語彙検索は一般的な慣習となっている。本研究は、マカオ大学の初級日本語学習者 22 名を対象に、スマホ画面録画機能で語彙検索プロセスを精緻に捉えた。検索語の出所、求める情報の内容、具体的状況、入力内容、所要時間、目的達成の有無を分析観点とした。その結果、多くの学習者が表層的な語彙処理に留まり、「調べて終わり」の傾向が見られた。一方で、目的未達成と申告した学習者であっても、単語を深く処理しているケースが確認された。この調査は、豊富で便利な辞書検索ツールが学習者の語彙処理プロセスに必ずしもポジティブな効果をもたらさないことを示唆している。学習者の検索行動の可視化を通じて、語彙処理を深めるための新しい学習支援を模索したい。

キーワード：語彙検索プロセス、学習者の行動可視化、単語処理の深さ、辞書ツールの影響

外国人留学生の受入政策の課題について一考察
——私費外国人留学生を中心に——

A study of Policy Challenges in Accepting Privately-Funded International Students

山口 顕秀¹

至誠館大学東京キャンパス

京 祥太郎²

至誠館大学東京キャンパス

要旨

日本の留学生受入政策は、2000年代以降の産業諸分野での人材不足により、高度人材の獲得を目指し、2008年に「留学生30万人計画」、2009年に「高度外国人材受入政策」が策定され、2019年度には留学生が31万人となり当初の目標を達成した。「30万人計画」が達成された今、更に、優れた留学生の戦略的獲得のため、「30万人計画」を見直すことも発表された。しかし、日本に留学してくる者すべてが想定された優れた留学生とは言えず、高度人材の担い手にあたると言い難いのも現状である。そこで、本発表では、近年の日本における留学生政策、特に留学生層の変化の激しい私費外国人留学生に焦点を当て、留学生受入れの現状と課題について考察を行う。

キーワード：私費外国人留学生、留学生政策、高度外国人材、留学生30万計画、留学生層の変化

分光学的手法によるセブ島出土の有田焼陶磁器片分析
——献上品と日用品の製法の違いについて——

Analysis of ceramic shards of commodities and tributes by spectroscopic methods

陸 郭人傑（代表）¹

大阪大学レーザー科学研究所

篠原 敬人²

大阪大学レーザー科学研究所

程 思哲³

大阪大学レーザー科学研究所

猿倉 信彦⁴

大阪大学レーザー科学研究所

清水 俊彦⁵

大阪大学レーザー科学研究所

Jose Eleazar Reynes BERSALES⁶

大阪大学レーザー科学研究所

要旨

17世紀から18世紀にかけて、フィリピンは東洋から西洋への貿易の中継地となっており、セブ島などでは有田と思われる陶磁器片も出土している。今日、博物館などで見られる当時の有田の陶磁器は、現代とほぼ同様の手法により色付けがなされている。一方、セブ島で出土した陶磁器片の中には、異なる特徴を持つものがある。これは、日用品と献上品で製法も異なっていた可能性を示唆している。これらの違いを明らかにすることで、道具としての陶磁器の役割や伝播に新たなストーリーを加えることができる。分光学的手法を用いると、肉眼では困難な比較も可能となる。本報告では、有田の窯跡の出土物などの陶磁器の分光学的分析について紹介する。

キーワード：有田焼、フィリピン、分光分析、釉薬、陶器製法

多様な背景を持つ学習者にとって「自己紹介」は簡単なタスクなのか
——「当事者」の葛藤を複線径路・等至性モデルで描く——

Where are you from? Exploring the conflict of self-introduction for learners of diverse backgrounds using the Trajectory Equifinality Model.

高 智子¹

国際交流基金関西国際センター

中井 好男²

大阪大学

荻田 朋子³

関西学院大学

津坂 朋宏⁴

東京福祉大学

要旨

自己開示を伴う「自己紹介」は、モノリンガルバイアスなどイデオロギーの存在から、多様な背景を持つ人の周縁化やラベリングなど、社会的公正性に絡む課題を持ち込む活動となりうる（中井他、2023）。そのため、社会的公正を理念とするウェルフェア・リングイステイクス（熊谷他、2023）（以下「WL」という）の観点から見ると、自己表現活動を重視する日本語教育においては、学習者の社会的公正が担保される必要があるだろう。本研究では、多様な背景を持つ「当事者」と「非当事者」による協働オートエスノグラフィーの記述から、「自己紹介」における自己開示の葛藤経験を複線径路・等至性モデルで視覚化し、WLを視座に自己表現活動を再考する。

キーワード：自己表現活動、イデオロギー、ラベリング、社会的公正性、ウェルフェア・リングイステイクス

日本の大学で学ぶ中国語母語話者と日本語母語話者の日本語力の比較
——Can-do statementsによる自己評価、語彙力、読解力に着目して——

**Comparison of the Japanese proficiency between Chinese native speakers
and Japanese native speakers studying at a Japanese university
— Focusing on Self-Evaluation using Can-do Statements, Lexical Comprehension,
and Reading Comprehension—**

田島 ますみ¹

中央学院大学

松下 達彦²

国立国語研究所／総合研究大学院

佐藤 尚子³

千葉大学

要旨

日本の大学の学部でともに学ぶ中国語母語話者の留学生と日本語母語話者の日本語力に関し、Can-do statements を利用した自己評価、学術共通語彙テストの得点、論説文読解テストの得点という三つの観点から比較を行った。自己評価において、学術的な語彙の理解は日中の母語話者間に差はほぼ見られず、長く複雑な文章の読解に関しては中国語母語話者のほうが高い自己評価をしていた。語彙と読解の2種のテストでは、日本語母語話者が中国語母語話者よりも高得点であったが、語彙テストよりも読解テストでその差は大きかった。サンプル数の少ないデータではあるが、初年次教育における日本語読解力向上を目指す際の教育的示唆を考察した。

キーワード：大学生、中国語母語話者、能力記述文、学術共通語彙、読解力

JSL 児童生徒の学習支援活動は教師としての成長をどう促すか
——教員養成課程における取り組みから——

How was Teacher Trainee's Development Facilitated through Experiencing Supporting JSL Children: An analysis of Practices of the Teacher Training Programmes

齋藤 ひろみ¹

東京学芸大学

浜田 麻里²

京都教育大学

要旨

本発表では、教員養成課程の学生の「JSL 児童生徒の支援活動」の実施による変容を、教師の成長過程として検討する。

大学 A では、学生インタビューで、現場の実践の意義とともに、母語話者を規範とした教育観、子ども観の無効性への気付き等が見られた。大学 B では、卒業研究としてフィールドワークを行っている学生は、テーマをもって支援に関わる中で、JSL 児童の学びが自身の関心事以外の多くの要素に支えられた複層的・統合的なものだと気付いていた。

現場での当事者としての参画により、自身の前提を超えて JSL 児童・生徒教育の全体性を捉える力を育み、教師として変わる／現場を変える力を育成できる可能性が示唆された。

キーワード：JSL 児童生徒、支援活動への参画、教員養成課程、教師の成長、変える／変わる力

会場周辺の地図

会場：香港大学專業進修学院保良局何鴻燊社區書院

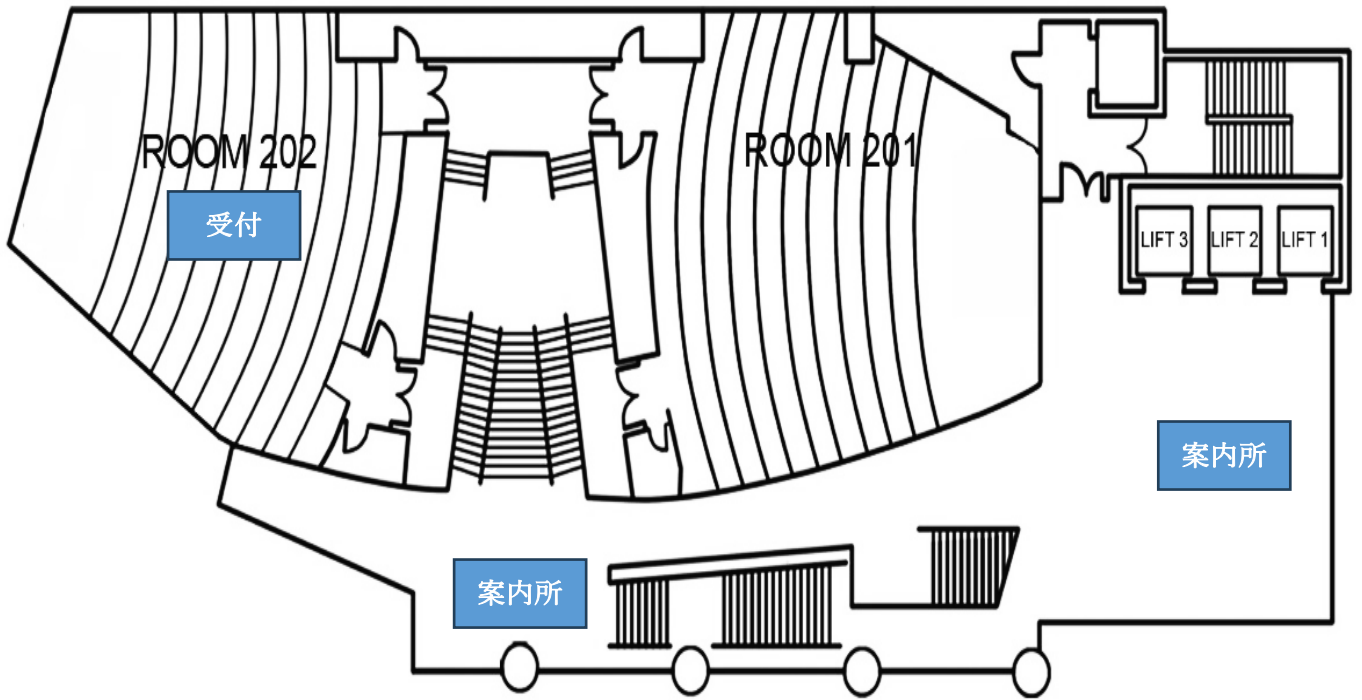
所在地：66 Leighton Road, Causeway Bay, Hong Kong

<https://maps.app.goo.gl/je83YYkCaK6pCnvv8>

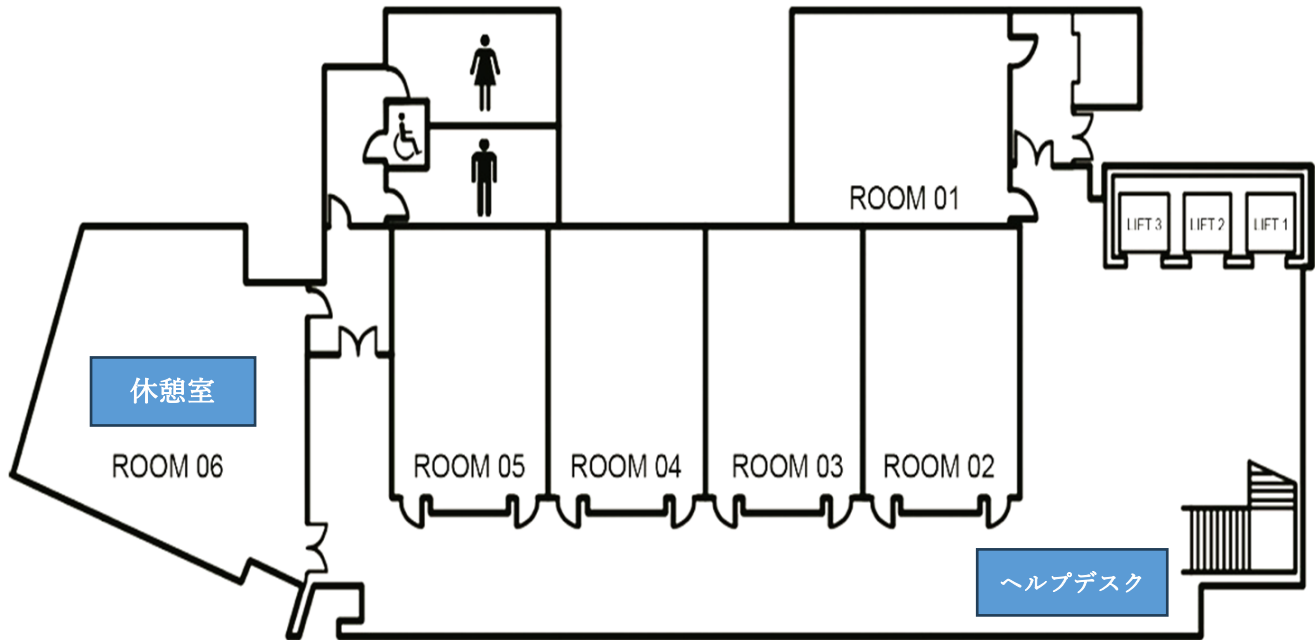


フロアレイアウト

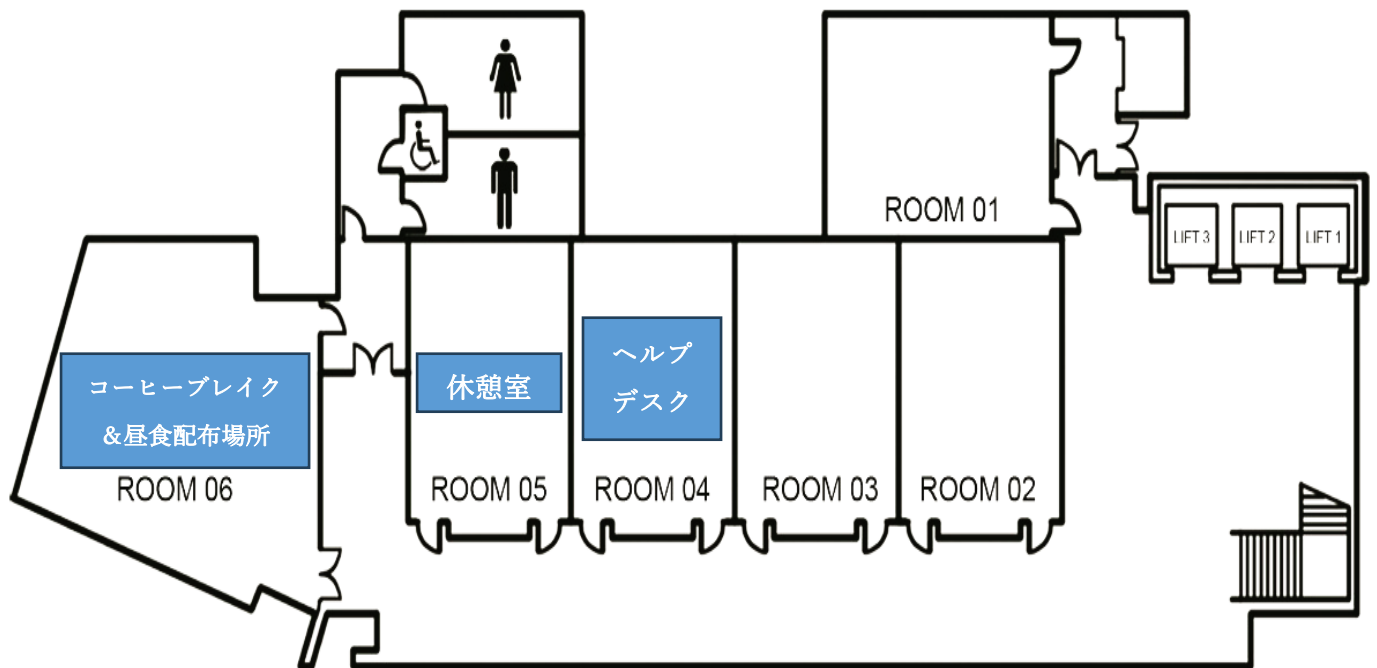
2階



11階



12階



懇親会会場への地図

レストラン：Imperial Treasure Chinese Cuisine

所在地：2/F Crown Plaza Hotel, 8 Leighton Road, Causeway Bay

<https://maps.app.goo.gl/q64MNAHk7qYBqYqV6>

